何故か英雄になったけど俺は闇堕ちしない

月光法師

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

前世の記憶はパッタリと途切れており、気付けば何故か銀髪ショタになっていた！ 体は子供！　頭脳は大人！　だけどモルモットだから動けない！　クッソ詰んでる状況に放り出され、それでも生きることを諦めない。そうして生きた先で、俺は何故か【英雄】と周囲から持て囃されていた。

ツンドラ合法ロリに、その妹の見た目だけ出来るウーマン。同類だと思って尻を狙ってくるガチムチダークエンジェルに、異様に尊敬してくるＡ級一位。周囲は我が道を行く奴等ばっかりで、上司やスポンサーは仕事を大量に放り投げてくる。

――どうやら俺の胃は英雄じゃなかったらしい。

※ダンまちの二次、片翼の天使（笑）な小説を思い出して書いた作品です。続きを書いて頂きたいと思い、この小説を書きました。

作者様に届けッ！　この思いッ!!!

目次

始まりの英雄 ―― 1
災害レベル【竜】宙が降る ―― 10
災害レベル【鬼】でも瞬死 ―― 36
災害レベル【鬼】変身後は不明 ―― 62
災害レベル【？】 ―― 147
異能研究会副会長 ―― 175
A市壊滅 ―― 183
向かう先は ―― 199

始まりの英雄

現代、日本。

この言葉を聞いたとき、諸君は何を思い浮かべる？様々なことを思い浮かべると思う。日本が世界に誇れるものは多いからだ。在野に埋もれている、まだ見ぬ素晴らしいモノも多い。

俺はそんな日本で生まれ育った。

平凡な家庭だった。お金持ちではなかったが、だからと言って貧しかったワケでなく。両親に離婚騒動が起こったこともあったが、無事に収束。不幸はなく、全てが素晴らしいと思える家庭だった。平凡、凡庸、一般的。そんな言葉が当てはまる家族で、そこで生まれ育った俺にもその言葉は当てはまった。年を取る毎に平凡だとか、凡庸だとか、一般的だとか、そういった在り方や言葉の有り難さを知った。

そう、とても幸せだったんだ。

「ギャオオオッ!!!」

大きな咆哮が聞こえる。街を破壊する音と共に。

俺がその音の元へと駆けつければ、そこには家屋程の大きさがある化け物が一体。街中で暴れまわり、人を脅かし、己の欲のままに凶悪はデカイ爪を振るっている。

「俺は捨てられた人形たちの怨念により、魂を得て甦った元怪獣人形だ！俺にカレーを溢したくせに、ウンコみたいな色で汚いとか言った人間のガキめぇ！絶対に許さん！本当なら俺は、可愛い女の子に買われたかったんだ！」

めちゃくちゃ下らない欲望で暴れてた。

こういった化け物たち。人々からは怪人と呼ばれている。人の形じゃないのに。虫っぽいやつも、獣っぽいやつも、全て怪人と呼ばれる。人の形じゃないのに。俺はずっと、めちゃくちゃ気になっているんだからな。なんで怪人って呼んじゃうの？

まぁいいや。俺は一つ溜息を吐いて、身の丈よりも長い刀を抜いた。そして一閃。怪人を縦に両断し、街中へと降り立った。

「キャーッ!!セフィロス様よー！」

「おおっ！英雄が助けてくれたぞッ！」

「ありがとう！セフィロス！」

「今日も格好いいわセフィロス様！」

「バカ！セフィロス様は美しいのよ！」

周囲で騒ぐ街の人たち。
みんな、もう分かったかな？
そう、俺はセフィロス・クレシェント。仕事でヒーローをやっているものだ（白目）

始まりは、何だったか。
……。ちょっと色々と思い起こしたけど特に何もなかった。始まりは突然だったからだ。ほんとクソ。
気がついたらこの怪人と超人が跳梁跋扈する世界にいて、俺は銀髪ショタになっていた。しかもなんか実験施設みたいなところで。
俺、どうやらモルモットだったらしい。
「最強の生命を造り出す」
それが目的だったらしい。研究員みたいのがブツブツといつも言っていた。ゴメン、

このセフィロスの体は無駄にハイスペックだったから全部聞こえてたよ。ほんとクソ。

「今日は被検体Sに宇宙からの飛来物体を移植してみよう。まだ見ぬ変化が見られるかもしれない」

おい止めろ。お前が小声でブツブツ言ってること全部聞こえてるからな。っていうか何変なモン移植しようとしてんだ。

そう言いたかった。まあ猿轡を噛ませて自害出来ないようにさせられてたから、俺は何も言えなかったんだけどね。ほんとクソ。

「今日は被検体Sに超能力者の細胞を移植してみよう。超能力者が人工的に増えれば成果は計り知れないぞ」

おい止めろ。この前移植手術したばっかだろうが。正確に言うと3日前。おま、そりゃないだろ。なんかもう完治してるけど、流石に術後経過の観察とかしろよ!·えっ、もう終わった?あっはい。

そう言いたかった。けど全身ぐるぐる巻きの俺には成す術がなかった。ほんとクソ。

「素晴らしいモノが手に入ったぞ!·これを食えばお前は最強になれる!」

そう言って、なんか気持ち悪い肉を食わされた。メカメカしい機械で無理やりに口を開けさせられ、喉の奥へと突っ込まれた。肉が胃に入った途端、俺は気持ち悪くなり、体が熱を帯びた。少しでも気を抜けば、自分が自分じゃなくなりそうで、必死に抗ったの

を覚えている。

気が付けば黒い片翼が背中から生えていた。ほんとクソ。

それからも色々な実験を施された。周囲がどんどんと死んでいき、そんな中で俺だけが生き残った。必然、様々な実験を耐え抜いた俺は、いつの間にか人間を止めていた。

そんな俺だったが、施設から解放されたのは今から１０年前。１８歳の頃だった。長い間モルモットとして生きてしまった。表情が死んで、仕事をしなくなったのもしょうがないと思う。

本当なら、人間離れした力でさっさと抜け出したかったのだが、それは出来なかった。命を握られていたからだ。心臓と脳に爆弾を埋められることで、反逆したと見なされた場合はすぐに頭ボンのドキがムネムネである。つまり爆発して俺の体がぐちゃぐちゃになって死ぬ。恥ずかしいだろ、言わせんなやい。

助かったのは偶然だった。新しく外から連れてこられたモルモットが暴れたのだ。今までにもそういうことはあった。その度に俺が無理矢理でも押さえ付けるよう命令されていたのだが、今回だけはいつもとは違った。

外から連れてこられ暴れたモルモット。そいつはサイボーグであり、この実験施設を壊すために送り込まれた兵器だったらしい。ようはスパイ兼ヒーロー、といったところか。

しかも俺に命令を送る前に研究員を皆殺しにしてくれたため、俺に何か被害があったわけではない。

そうして、俺はクセーノ博士という老人に助けられた。

クセーノ博士は所謂、天才であった。俺の頭と心臓に埋められた爆弾を取り除いてくれたのだ。更に戸籍のない俺に様々なものを恵んだ。専用の装備なども作ってくれた。ありがとうクセーノ博士。名前は変だけど、めちゃくちゃ良い人だった。あと、クセーノ博士は別に臭くなかった。勝手に臭いんだろうなとか思ってスマンかった。

現在も使っている長刀【正宗】もクセーノ博士の一品だ。なんでも形状記憶合金を応用しているとかで、鞘は小刀ほどだというのに長刀は全て収まってしまう。お陰で持ち運びは楽チンだ。

これだけお世話になったクセーノ博士。俺も何か返さなきゃならない。そう思い、俺は頑張った。何もない俺だが、強さにだけは自信がある。だからこの世界のことを色々と調べて、一つの答えへと至った。賞金首を狩ることだ。賞金の高いやつはウン千万からウン億円も懸けられていたから、俺にはお手軽に稼げる仕事だった。恩を返すために、クセーノ博士の研究費として出資もできる。

それからだ。最悪な日常から救われたと思ったのに、違う意味で最悪な日常が訪れたのは。

まず賞金首を狩る中で、ほぼ１００パーセントの確率で誰かが襲われている時に遭遇してしまう。意味が分からない。

そして俺の前によく怪人が出現するようになった。その時には賞金稼ぎで顔と腕が売れていたから、見て見ぬ振りをしては俺の評判に関わる。評判が落ちれば人間関係に亀裂が生まれる。人間関係に亀裂が生まれれば情報収集が捗らない。情報収集が捗らないと賞金稼ぎが難しくなる。あと、クセーノ博士に万が一の迷惑が掛かれば、俺は俺を許せない。

そうと決まれば早かった。

俺の前に現れる怪人をバッサバッサと斬り倒していったんだ。その内、何故か俺は英雄と持て囃されるようになった。

そして運命の日が訪れてしまったんだ。一枚の手紙と共に。

【英雄】セフィロス・クレシェント様へ

初めまして、セフィロス様。

私共はヒーロー協会と申します。ヒーロー協会とは、市民を救うためにヒーローを組織、管理することを目的に、この度設立されました。
それに従いまして、【英雄】と巷で称えられるセフィロス様を是非とも弊協会にてお招きしたいと考えております。
詳細につきましては、同封の案内をご覧下さい。
会える日を楽しみにしております。

差出人　ヒーロー協会より

こんな感じの手紙だった。そして同封されていた案内を読めば、ヒーロー協会は設立されて最初に、俺をヒーローのトップとして協会に所属して欲しい旨が書かれていた。
何よりも俺は、案内に書かれていたお給料の額に目が眩んだ。
これだけ貰えば、毎日毎日賞金首を探す必要がない！クセーノ博士にも毎月安定して研究費を出資出来る！何よりも毎日ダラダラと生活できる！

金に目が眩んだ俺は、二つ返事でヒーロー協会に所属することを決めた。
そして生まれてしまったんだ。
Ｓ級１位ヒーロー【英雄】セフィロス・クレシェントが。
最悪の職場に就いてしまった、愚かな社畜が生まれてしまったんだ。
戻れるなら戻りたい。賞金稼ぎとして生きていたあの頃。賞金首を探すのは大変だったけど、自身の自由が確保されていたあの頃に、俺は戻りたいんだッ！

災害レベル【竜】宙が降る

少し過去を振り返ろう。なに、昔話というほど遡る話じゃないさ。

今から三年ほど前の話。俺がヒーロー協会からヘッドハンティングを受け、給金に釣られてホイホイと承諾の旨を伝えた後のことだ。

ヒーロー協会の動きは恐ろしい程に迅速だった。具体的に言うと、各方面への宣伝と喧伝が半端じゃなかった。

曰く、英雄セフィロスという男がヒーロー協会にて最初のヒーローとなった。

曰く、英雄セフィロスが今後ヒーローたちのトップとして地球の平和を守る決意を表明した。

曰く、英雄セフィロスに倒せぬ敵なし、守れぬ人なし、打倒出来ぬ困難なし。

曰く、曰く、曰く……。

……うん？

……え。

いや……え。

ちょっ、待ってえええええええ!!?!?

超待ってえええ!!!

英雄とか呼ぶのまず止めて!!　あれだよね？　お金目的で賞金首狩ったり、異様に出会う怪人が鬱陶しくて片っ端から叩き切ってたら、なんか皆がいつの間にかそう呼んでたんだよね!?

それをさぁ、なんかよく分かんないけど権力者の多いヒーロー協会が宣伝やら喧伝しちゃったらさぁ、なんかそれが公式みたいになっちゃってるよね？

あの、本当勘弁してください。

ちゃうんです。賞金首狩ってたのとか真面目にお金目的やったんです。怪人とか滅茶苦茶出会うし襲ってくるしで半ギレで斬ってただけなんです。

それをこう、ね？　英雄だー！　すごいー！　みたいに持ち上げられても素直に喜べないんだ……。

これ悪い風潮だからな！　やりたくもないのに学校で委員長とかさせられる奴の気持ち考えたことあるのかよ！　放課後とか早く帰って遊びたいのに先生の手伝いで暗い廊下を一人トボトボ歩く悲しみが分かるのかよ！

えっ、ちょっと違う？　伝わればいいんだ。

要は俺も無理矢理やりたくない仕事をさせられてる。しかもその方法が相応しくない呼び名を悪用して外堀から埋めるという悪辣さ。

……ヒーロー協会こえぇ。

あとさぁ、俺がいつ！　地球の平和を守る決意表明したんですかねぇ!!?

全然ッ！　一言もッ！　言った覚えがないッ！

ホント誇大広告もいいとこなんだよなぁ（遠い目）

それでなに？　倒せぬ敵なし、守れぬ人なし、打倒出来ぬ困難なし？

それ敵倒せなくても人一人守れなくても全部の非難と罵倒が俺に来るやん！　ブーイングのスコールがピンポイントで発生してまうやん！

しかも打倒出来ぬ困難なしってなにそれ……ッ!!

おま、それはやっちゃ駄目だろぉ！　やっちゃ駄目なやつやん……（悲しみ）

つまりこう言いたいんだよね？

ヒーロー協会「ウチらが命じた案件は絶対完遂。拒否権とかねぇから。どんな無茶振りでもクリアしろよ」

任務を完遂出来なかったら……。

宣伝と言ってることが違う！　→周囲からの信用失墜！　→ヒーロー協会の株が暴落！　→お前責任取ってクビな！

なんてことになりかねないのでは……。元々信用とかないよね、なんて言わないでね！　ペーペーの新人に信用寄越すわけないことくらい分かってるから！

いやしかし……。

……。

２８歳独身無職。特技は棒振りです！

キツい。これはキツい（迫真）

この年で無職になるのはキツいし、なによりも折角就職が決まってクセーノ博士を安心させてあげられたんだ。その安心をぶち壊したら俺はもうクセーノ博士に顔向けできない。

主に申し訳なさと情けなさから。

まあそんな感じでね。

個人の意思なんてガン無視するのが常道と謂わんばかりなわけでして。

これが世界か。俺、真理の一端を得る（不本意）

それでまあ、とにかくヒーロー協会が俺をガッチガチに固めてるんだ。命令は絶対遵守の完遂的な意味で。

所感としては、ドラム缶に突っ込まれてコンクリ流し込まれて鎖で雁字搦めにされてる以上に感じてる。

これまじだから（真顔）

まあそんなわけで、一番最初にヒーローになってしまった俺に下された任務内容は『確かな実力を持ったS級ヒーローの確保』だ。

流石に大富豪が設立した組織。集めた職員たちは優秀だ。資金もある。一から十までのマニュアルも既に出来上がっていた。宣伝もバッチリでヒーロー志望応募者は多かったらしい。あとはテストを行いそこで基準値に満たなかった者をふるい落とすだけ。

だが真の実力者は協会から事前に、直にヘッドハンティングを受けている。当たり前だ。平和を謳う組織を設立しても、実働する手足が、それも強靭で万人が安心出来るだけのモノがなければ意味がない。応募者を募ってそこから発掘なんてナンセンス。

事前の準備はとても大事なのだ。どうやらヒーロー協会はそれを怠らなかったらしい。

S級という階級も在野に埋もれた実力者、またはその原石を発掘し確保するためのものらしいし当然か。

まあ、多くの権力者や資産家が集まっていたため、どれだけ強かろうと所詮一個人の情報など簡単に手に入ったはず。

それらの情報を俺も渡され、彼等を協会所属のヒーローにするよう説得をしてくれ、

と。

渡されたリストには十数人ほどしか人物の情報が記載されていなかった。どうやら協会の方で厳選した人物らしい。そのリストの中から最低三人は連れて来て欲しいらしいが……。

悲しいことに皆が皆、協会からの勧誘の手紙に色好い返事を返さなかったらしい。無視する者も多かったとか。

……あの時点で承諾したのは俺だけだったらしい。

こんなことを協会職員さんに言われた。

「英雄セフィロス。貴方がここに来てくれて本当に助かったよ。僕たちの未来は明るい」

とても晴れやかな笑顔だった。

（どんな仕事でも押し付けることが出来るから）僕たちの未来は明るい、って言う意味じゃないよね？　職員さんのメガネが反射して瞳が見えないですけど、晴れやかな笑顔（ただし目は笑ってない）じゃないですよね？　ね？

クセーノ博士ェ……俺はもう、駄目かもしれませんンンン!!

と、そんなこともあり。職員と長く会話して胃が悲鳴を上げてきたので俺は颯爽とその場を後にした。いざ人員集めにと俺は飛び立ったのだ。

しかしまあ手紙に色好い返事はなかった、若しくは無視である。なんとなく想像はついていたが、会う奴どいつもこいつもアクが強い。

ほとんどの奴等が、勧誘の言葉を俺が放ったと同時に仕掛けてくるってどういうことなの（白目）

唯一しっかり話せた流水岩砕拳のバングさんは天使。だが手合わせはしっかりした。本当にどいつもこいつも肉体言語しやがってぇ！

そして相手方の事情も試みた上で、俺が承諾を貰うことが出来たのは四人であった。

彼等彼女等こそ最初期から現在まで、S級にて最強格との呼び声を維持し続けているヒーローたちである。

S級2位　ブラスト
S級3位　戦慄のタツマキ
S級4位　シルバーファング
S級5位　アトミック侍

因みに協会がＳ級ヒーローを召集するとき、毎回ちゃんと集まるのは俺とバングさん……シルバーファングだけである。

おい。来てねぇ奴等まじ許さねぇかんな。他の案件入ってたならいいけど、遠いからとかサボりとか……。

仕事しろよぉ！　頼むからぁ！　俺が一番働いてるって可笑しくない!?　協会の秘密兵器的な立ち位置じゃないの俺!?

あっ、違う？　そうですか……。でも一応Ｓ級１位なんだし他に仕事回した方が……。災害レベル竜以上は君に任せる？　アッハイ。

俺はもうすぐ死ぬかもしれない。主に過労で。

つーかさぁ、ここ地球だよね？　災害とか怪人が多過ぎでしょ！　それにプラスして犯罪組織とか凶悪犯罪者も多いし！　プラスして事件ある度にお偉いさんの警護として呼び出されるし！　プラスしてモデルの仕事してこいとか言われるし！　いや最後ヒーロー関係ないよね!?

おまっ、まじ俺の睡眠時間を返せよぉ。

ショートスリーパーを強制されるとか新手のイジメだよこれ。それでも全然平気なのがセフィロススペックなんだよなぁ。そして平気そうだからって更に仕事が増えるんだよなぁ（絶望）

この国の労働環境ブラック過ぎワロタ。

いや、ごめん。笑えねぇ……。

中身一般人だから相当キツい。逸般人にはなれなかったよ……。

だがそれもこれまでだ。

俺はついに希望を見つけたのである！　というか現在から一、二年前くらい前からその人物は目撃してたんだけど。

多分、年は俺よりも少し若いくらいの男性。ちょこちょこ俺が一方的に、彼と怪人との戦いを観戦してただけなのだが、その男性がすごい。めちゃくちゃ凄い。

最近なんて怪人をワンパンで倒すところしか見てない。

何故かいつの間にかハゲてたけど。そのときは同一人物とは思えなかったくらいだったけど。

取り敢えずとてつもなく強いのだ。メキメキ実力を上げてたけど、最近じゃ彼、敵なしなんじゃないかなぁ。

そして俺はピーンと来た。セフィロス脳細胞にあれほど感謝したことはないね。世紀の大発明を越える思い付きだった。

ふふふ、そうだ！　彼をS級1位ヒーローにしてしまえばいい！　そして俺は彼をスケープゴートにしてヒーローを辞めるぞぉ！

俺はッ!!!
ヒーローを辞めるぞジョジョオオオオ!!!!
おっと失礼。テンションが上がってつい。
いやしかし。本当に希望だ。彼は逸材だ。
ただ、彼はどうやらヒーロー協会には所属していないようだ。調べてみたが協会には登録されていなかった。
ふむ……。もしかしたら彼もヒーロー協会に所属したくない理由があるのかもしれない。今時ヒーロー協会を知らない人はいないから、多分そうなんだろう。
ああでもなぁ。彼が欲しい。めちゃくちゃ欲しい。是非ヒーロー協会に来て欲しい。
そして願わくば俺と立場を入れ替えて欲しい。
そして俺のことも助けて欲しい。
なんとかヒーロー協会に所属してくれないかなあ。
灰色の脳細胞は高速回転し、なんとかしようと唸りをあげる。……どうしよう。取り敢えず会ってバトって協会に来るよう納得させる方法しか思い付かない……ッ！
これも全部、今までの経験のせいなんだようん。普通に考えたら力付くでしか物事を解決してないからね俺。賞金首も怪人もヒーローにもなんとか勝ってきたけど、よく考えたら彼等とのバトルしかしてないからね俺。研究所から解放されてそれだけって俺

の人生薄すぎない？

まあヒーローに関しては全部あっち側から仕掛けてくるんだけどネッ！

ふむ。よろしい。ではまずは彼に会いに行こうではないか。

《ピピピピピピピッ！》

……！

この音は……ッ!!　くっ！　なんという間の悪さだ。まずいな。どうやら彼に会いに行けなくなってしまった。

だが仕方ない。仕方ないことだ。これこそが俺の使命であり宿命なのだから。

なに。思うところはあるが、これも俺が背負っているものだ。はね除けることなどせんよ。

さあ、行くか……！

S級1位ヒーローとして、人々を脅かす者共の元へ。

――正義、執行

とかなんとか格好つけて言ってみたけどね。テンション上げなきゃやってられんよ！

今日も協会から呼び出し食らったので逝ってきます（社畜感）

◇

その日、地球には大きな危機が迫っていた。
空を見上げれば、否が応にも目につく巨岩。いや、それは巨岩で済ませていいものか。
それは天の失墜。神の裁き。地球の歴史を漂白しかねない脅威。宙から飛来した塵である。
――――隕石。
人はそう呼ぶ。
過去には天降石とも記された飛来物。人々が隕石に対してどのように解釈していたか、それだけで理解に足る。
人々は空を見上げて涙を流した。
あれほどの脅威。人の身には如何ともし難い。誰もがそう思った。
もしかすると一部の力ある者たちはそう思わなかったかもしれない。自分ならばどうにか出来る。日本への被害が甚大でも自分なら問題ない。

しかし悲しいかな。一般の人々はそうもいかず、また落下した際に周囲の地表にある資源はその悉くが芥となるだろう。

隕石は直径数十メートル。下手をすれば百メートルに届くやもしれない。

直径一メートルから十メートルのものはそれなりの頻度で地球へ降り注いでいるが、その多くは大気圏で燃え尽きてしまう。

今回に関してはそれも到底期待出来ない。

仮に直径百メートルもの隕石であった場合、ＴＮＴ火薬換算で約一億トンにも昇る。この数値は脅威だ。

世に言う原子爆弾。非道の核兵器であり、人命を踏みにじる最悪の破壊兵器。たった一発で半径数キロが被爆圏内となり、半径一キロ圏内を死臭と瓦礫で満たす。

そんな、皆がふと頭に浮かべる某原子爆弾はＴＮＴ火薬換算で実に一万五千トンにも昇る。

そしてこの原子爆弾に換算した時、直径百メートルの隕石は原子爆弾約６６６６発と同等の爆発力となる。

さあ、これで隕石の脅威は具体的となった。

恐ろしさが、表面に浮き上がった。

今回、この隕石を観測した協会。彼等によってＳ級ヒーローはＡ市の協会本部に集め

られた。協会からの指令は一つ。この隕石をどうにかしろ。端的に言ってこの一言だ。
なんとも無茶苦茶な指令とも呼べないもの。しかしＳ級ヒーローにとっては日常茶飯事なのだから、世に平和というものがあるなら疑う他ない。
集まったのはＳ級１８位ジェノス。Ｓ級４位シルバーファング。そして最後に一人。
「――今回は三人か」
ジェノスとシルバーファングが会話をしている最中、奥の影からカツリと靴音が響き、次いで耳障りのいい美声が二人の鼓膜を震わせた。
「セフィロスくん、来とったのか。久しぶりじゃのう」
「お前は……。Ｓ級１位、英雄セフィロスか」
「ああ久しぶりだ、シルバーファング。そしてお前は……新人のジェノスだったな。俺のことはセフィロスで構わない」
よろしく頼む。そういって気負うことなく差し出されたセフィロスの右手。
ジェノスはじっとそれを見つめて、脳内でのみ圧縮された時間の中思考する。
（Ｓ級１位。つまりは全ヒーローのトップに立つ存在。こんなにも早くに出会えるとはな。サイタマ先生から出された課題は『Ｓ級１０位以内を目指すこと』。こいつの強さが判れば見えやすい強さの指標になるだろう。流石にサイタマ先生ほどではないだろうからな……）

ジェノスは黙ったままセフィロスの右手を握り握手を交わした。
「無口なやつだ」
「何いっとるんじゃ。それはセフィロスくんもじゃろうが」
「そうかもな」
薄く笑いながらシルバーファングとジェノスを見て、セフィロスは満足そうに頷いた。
「有望株だな」
「ッ!!?」
「ほお！　君がそういうとは珍しい」
シルバーファングが目を見開いて驚く中、隣で握手をしたままジェノスは固まってしまった。驚きに体が硬直したからだ。
（バカなっ!?　まさか握手をしただけで俺の実力を完全に把握しきったというのか!?　俺はサイボーグだぞ！　そんなことが……！　いや確かセフィロスは剣の達人。武を極めた者は拳を合わせただけで相手の力量を看破するという。ならばこれもその一種か？　真偽は不明だが魔法とも超能力とも言えるような力さえ持っているらしいことを考えれば納得か……。この男……底が見えない）
「どうしたジェノスくん」

シルバーファングの声にジェノスはハッと気が付いた。どうやら自身が固まってしまっていることさえ思考の外にあったようだ。

ジェノスは握手をほどいた。

「いや、なんでもない」

セフィロスはその動作さえ興味深そうに見つめている。ジェノスは自身の全てを暴かれている最中なのかもれないと戦慄した。この男は平時の動作から全てを暴ける程の洞察力、観察眼を持っているのかと。

なんとなくジェノスはその場を早く去りたいと思った。その思いが天に通じたのか、市内全域に警報が鳴り響く。

巨大隕石接近を知らせる警報だ。

他のS級ヒーローはもう来ないだろう。協会本部に向かっている最中だったとしても、待っている時間はない。

セフィロスは見切りをつけた。

「急行するぞ」

シルバーファングとジェノスも異論なく、三人で隕石落下予測地点、Z市へと急ぎ飛び出した。

比喩ではない。建築物の屋上や屋根を足場にしながら風を切り裂き進んでいるから

だ。

常人が見れば霞むような速度で駆け抜ける三人。その脚力と持久力は文字通り、人の限界を超えていた。

目標地点、到着。

それと同時にジェノスがサイボーグとしての装備を装着する。両腕の指先から顎のラインまでを覆うメタルブラックの装具。それは美しく光を反射させていた。

空を見上げれば燃ゆる星屑。

もう、時間はない。

「……相変わらずだな」

「なに?」

ポツリ溢したセフィロスの言葉をジェノスが拾う。

何が相変わらずだというのか。シルバーファングに対して言ったのか、それともジェノスに対して言ったのか。

ジェノスに言ったのなら、サイボーグに何か思い入れでもあるというのか。

(もしそうだとすれば奴への手掛かりが掴めるかもしれない)

「……メタルナイト」

またもセフィロスが溢す。

その視線は定まっており、だとすれば先の言葉もメタルナイトに対してのものだったのか。

だがここにメタルナイトはいない。

そうジェノスが思ったのも束の間。

（……！　高速接近反応。まさか……）

ジェノスが搭載する高速接近反応に動きがあった。数は一つ。方角はセフィロスの視線の先だ。

大きな駆動音を響かせながら飛翔する金属塊が近付いてくる。ブースターをジェット噴射させて飛ぶ様はまるで流星のよう。

ジェノスとは違い一目で分かる全身サイボーグのヒーロー。彼こそＳ級８位メタルナイト。

「……ボフォイか」

ジェノスはメタルナイトの本名を独り言つ。ただの確認作業だ。

思考はメタルナイトではなくセフィロスの方へも割かれているが故に。

（なんという感知能力！　クセーノ博士が設計し、俺に搭載されている機器はどれも高性能なもの。だというのに奴は易々とそれを超えている）

なるほど。この一幕だけでもＳ級１位の名が伊達ではないと理解できる。

それからジェノスがメタルナイトへ隕石破壊の協力を要請するも、すげなく断られてしまった。メタルナイトは兵器の実験に来ただけであると言う。おまけにメタルナイトからジェノスへ、本名ではなくヒーロー名で呼ぶことが常識だと注意する始末。

中々な個性を発揮するメタルナイト。しかしやり取りを見る限り、悪人ではないのだろう。個人主義で偏屈な部分が強いようだ。

他のヒーローも多かれ少なかれ似たり寄ったりだ。それはそれで問題な気もするが、あまり気にしていてはヒーローを続けるなど不可能だろう。

「ソレニ　私ガ協力　スルマデモ　ナイダロウ」

「どういうことだ」

「セフィロスくんがおるなら問題ない。メタルナイトが言いたいのはそういうことじゃろう」

ジェノスがチラリとセフィロスを見やる。

どうやらセフィロスは相当に信頼されているらしい。テレビや雑誌でも特集が組まれるのは珍しくないようだが、なるほど。それらが事実ならば相応の実績があり、故に彼等は信頼を向けているのだろう。

「ダガ　セフィロス。オ前ハ　最後マデ　手ヲ出スナ」

どうやらそれでもメタルナイトは実験を優先するようだが。いや、セフィロスがいる

からこそか。後を気にする必要がないのはでかい。
「いいだろう」
軽く頷いたセフィロスを後目に、いよいよ無視できない距離に迫った隕石へ全員が意識を注ぐ。
「ジェノス、いい機会だ。お前の力を見せてみろ」
（俺の力を測るつもりか？）
ジェノスは再度、巨大隕石を見上げる。
これほどの大質量、高エネルギーの物体を自身が打ち砕けるのか。疑問が押し寄せ、解を導きだそうとするも更なる問題が浮上する。
メタルナイトが数多のミサイルを撃ち込んだ。大威力の破壊兵器だ。それは隕石へと衝突し、光を炸裂させ、大煙幕で空を覆う。
そうして的となった隕石は――変化、なし。
変わらぬ姿で地表へと迫り来る。それが更なる動揺と疑問をジェノスへもたらした。
「心に乱れが見える。お主は失敗を考えるにはまだ若すぎるのう。適当でええんじゃ、適当で。土壇場こそ、な。結果は変わらん。それがベストなんじゃ」
「！」
何かに気付いたのか、それとも思い至ったのか。ジェノスはそれまでの掌へのエネル

ギー充填を中止。胸部を開きコアを取り出すと、それを腕部へ嵌め込み更なるエネルギーを出力した。

そしてそこから得たエネルギーを全て掌へ。

そのまま隕石へと照準を固定。

「バング、セフィロス、伏せていろ！」

放出。

光の柱が、突き立った。

「うおおおおお!!!」

咆哮。

失敗や二次的な被害を度外視した全力の一撃。今できる全てを捧げた一撃だ。

反動で今立つ地面がひび割れる。

それほどの一撃を放っても――隕石は止まらない。

エネルギーが尽きたのか、熱を冷却する音を鳴らしながら膝を突くジェノス。

「残り9秒」

ジェノスはセフィロスのことをよく知らない。

セフィロスは有名だ。故に真偽は不明にしても多くの情報が手に入る。多くの敵を打ち倒したのだろう。災害を対処したのだろう。実績も功績も素晴らしいのだろう。

だが、セフィロスに言われるがまま巨大隕石と向き合ったジェノスからすれば、あれは人に破壊出来るモノではない。素直にそう感じた。

逃げるんだ。

ジェノスがそう言おうとして、セフィロスとシルバーファングへ視線を向けたとき。

ジェノスは見た。

セフィロスの天高く掲げられた右手。そこに集まる常軌を逸した力の波動。

聞き取れない程の小さな声でセフィロスが何かを口にした。隕石の迫る轟音も合わさり、誰にも聞き取ることは出来なかった。

「――――」

変化は劇的だった。

巨大隕石を包む透明な膜。更に小さな無色の球体が列なして巨大隕石を囲んでいく。幾重にも幾重にも囲んで、それは一瞬の出来事だった。

――――巨大隕石、停止

「……バカな」

「なんと！」

「……」

呆然と呟くジェノス。数年の付き合いがあるシルバーファングも初めて見たのか、驚

愕に目を見開く。メタルナイトは沈黙を保っているが、その心境は如何なるものか。

しかし驚愕はそこで終わらない。

これまたいつの間に構えていたのか、左手に握る長刀を一瞬の溜めの後、解放。

――――閃光

直上まで迫っていた隕石へ一振り。否、誰にも一振りとしか認識出来なかっただけ。周囲から見ればそれはまるで、斬撃だけが虚空から無数に生まれ、隕石をただの石ころへと変えていくよう。

なんと恐ろしい絶技。人はこれほどまでの境地に到達できるのか。

まだ、終わらない。

無数に切り裂かれた隕石はデカいだけの石ころへ姿を変えた。それでもこれほどの数量、質量。街へ落ちればそこは石ころが山と積もり、押し潰されてしまうことは想像に容易い。

何しろ百メートルに迫ろうかという巨大隕石だ。それを停止させ、ここまで切り刻んだことだけで既に領域外の成果。

だというのに更に先を目指すというのか。

左手の長刀を地面に突き立て、再度右手を隕石へ。いや、もう隕石とは呼べない。人の胴体程の大きさに斬り分けられたソレ。

セフィロスの右手は何を掌握しているのか。何かを掴むように伸ばされた右手の先で、灼熱が集まり出す。

石ころの群れの中心へ。セフィロスの斬撃が通った後を道標に、次々と中央を目指す燃えるエネルギーたち。透明な膜の中で集った灼熱は人の角膜を焼き付くすような。

なんといったか。それはいつも目にしているモノだ。しかし人の手が届かないモノ。隕石と同じく、過去には神として奉られていた存在。

ああ、あれはそう――――太陽

どういった原理なのか。セフィロスは神すら手中に納めるのか。ああ、分からない。分かるのは石ころの群れの中心に太陽が生まれていたことだけ。そして無色の膜が唐突にふと消え去った瞬間。ガラリと石ころたちが音を立て、天を見上げた誰もが未来を想像し。

「――――フレア」

太陽が、爆ぜた。

隕石の数分の一程度の、しかし大きな太陽は。隕石の迫る轟音が無くなった不思議なしじまの中、セフィロスの常と同じ声音で放たれた言葉を切っ掛けに何倍にも膨張した。

風鈴のように周囲へ反響し、耳奥に残るたった一言だった。

フレアは石ころの群れを悉く呑み込み、内にある全てを莫大な熱量で煤へと変貌させる。後に残ったのは、隕石の質量からは考えられない程の少ない煤。それらはフレアの熱量が尽き、外界に晒されたが最後。風に吹かれて更に塵芥となる。

星の大気の流れを汲み、彼等は地球を廻るだろう。天から失墜する運命にあった一つ。彼等はまた翼を得た。この星から出ることは叶わないが、それでもまた旅に出た。宇宙を廻る壮大な旅と比較すれば陳腐だが、それでも悪くない結末だ。

「任務完了。帰投する」

周囲が止まった時間の中。

限られたヒーローたちにのみ支給されている協会専用の携帯端末で報告を簡潔に済ませるセフィロス。

まるでいつものことだ。

背中でそう語る姿の、なんと遠いことか。

長刀を納め、携帯端末を懐へ仕舞い、セフィロスはヒーローの後輩たちへ視線をやり、柔らかく微笑した。

「どうした? 帰るぞ」

バングは。

メタルナイトは。

ジェノスは。
頂点に立つヒーローの偉大さを刻み付けられる。
眼下の街では喜びにうち震える歓声が響き渡っている。今回の巨大隕石を観測し、ヒーローたちへ無理難題だと理解しつつも、信じて任務を告げた協会でもそれは変わらず。
ただ、この場にズレた存在がいたことを誰も知らない。
知っているのは本人と、あとはその親しい存在のみか。
いつもは感情も気力も抜け落ちたようなやる気のない顔を引き締めて。隕石を完全破壊したことすら眼中になく。偉業とすら認識しない存在。
ただ見つめるのは、英雄と呼ばれる男の在り方。その力。それのみ。
成した功績などどうでもいい。
常なら人に興味など懐かない彼は、その男に心を擽られた。
彼はじっと男を見つめて、一歩を踏み出した。

災害レベル【鬼】でも瞬死

取り敢えず今日も無事に……無事？　うん、無事に一日が終わった。
隕石の処理任務を完遂できたからね。もう引退会見してもいいレベルなんじゃないかなぁ。
言って気付いた。俺がヒーロー辞める時って会見開かなきゃならないんだろうか……？　一応Ｓ級１位だし、可能性はなくもない……？
もうやだよー！　パッと辞めたいよパッと！
やめよやめよ。折角いいことあったのに、気分が沈んじゃうよ。
そう。今日は良いことがあったのだ。
協会に呼び出され、職員さんから任務内容を聞き、その場で「この前Ｓ級に新人さんが出来ましたよー」って聞かされ……。
おーい。この前っていつだよ。というか知らせるの遅くない？　一応Ｓ級１位ですよね自分……？

そしてちょっと痼(しこり)が残りつつもジェノスくんの話を聞いたんだ。
１９歳でサイボーグ。ヒーローテストで満点を叩きだし、情報によれば数々の怪人悪人を討伐。直近だと進化の家なる秘密組織を壊滅させた実績を持つ。大金星を上げ続けてきた期待の大型ルーキー。
なるほど。すごい実力を持っているようだ。Ｓ級の一種の資格である、災害レベル【鬼】を単独で対処できる能力もあるようだしね。
しかし俺が注目したいのはそこじゃない。そこじゃないぞ！　この俺が直々に見極めてやるわ小僧！　このＳ級１位のセフィロスがなぁ！　あっ、大口叩いてすんません……。
あまり期待していなかったが、ジェノスくんは今回の任務で協会の招集を受けてやって来た。
おっ！　ちゃんと来たのはお兄さん的にポイント高いぞぉ（チョロい）
ジェノスくんと自己紹介をした際「セフィロスって呼んでね！　よろしく頼むよ！英雄とかって呼ばないでね（震え声）」って言ったらフランクに呼び捨てで呼んでくれた。ポイント高い（チョロい）
おいおい良い子だよこの子！　絶対良い子だよ！　ちゃんと任務に来るし！　頼んだら素直にその通りにしてくれるし！　フランクだけど全然嫌味じゃないし！　逸材

だ！　めちゃくちゃ有望だよ！

この子もＳ級１位枠だな！（チョロい）

それで自己紹介だけ済まして俺たちは現場に向かった。

到着して空を見上げると、おっきな隕石が。

わー、すごーい（白目）

思わず協会に対して「相変わらずだなー」って言ってしまったのは仕方ないことなんだ。

だって安定の無茶振りなんですもの（諦め）

いやね、ここに来るまでに隕石見えてたよ？　なんか思ってたよりもデカくね？　とか考えてたよ？

でもいざ落下予測地点に到着したらね。なんか、思ってたよりもデカくね……。無理くね……。

ってなったのは仕方ないと思うんだ、うん。

まあジェノスくんが何処までやれるかまだ分からなかったから、早計な決めつけだったかもだけどさ。

そしてそこへ合流してくるメタルナイト。

なんか隕石を見て悟りを開いてたらキラリと光るメタルボディが見えたんだよね。

やったぜ！　これで勝つる！

だってあのメタルナイトだよ？　個人でどれだけの兵器を所持してるか分からない。協会からも警戒されて要監視対象になるほどの人物だよ？

そりゃすごいでしょ！　あんな隕石一発でしょ！　やっちゃってくだせえメタルナイトの旦那！

まあ常にはただの問題児なんですけどね（）

ほんとS級ヒーローこんなのばっかりだよぉ。有事の際には頼りになるんだけどね、有事の際には。有事の際だけはね！（三回目）

そして今はその有事。彼等は立派にことを成してくれる筈さ。

なんとなく皆を見ていて気付いた。

おっ！　サイボー組やん！　S級のサイボー組やん！　これ中々いいコンビちゃう？　隕石逝かせるなんてイージーモードなんちゃう!?

ふっ、勝ったな（慢心）

えっ？　駆動騎士？　知らない子ですね。

しかしこの二人だったら良いコンビだと思うんだよ。二人ともサイボーグだから（単純）

だから言ったんだ。「ジェノスくんの良いとこ見てみたいー」って。

それから二人が協力して隕石撃破！　とはならなかった。
メタルナイトが早漏野郎だったからだ（罵倒）
お前さ～、ホントそういうとこだぞ！　今のは協力するとこでしょ普通！　なんで一人でやっちゃうんだよー。しかも全弾撃ち尽くすしー。隕石も壊れてないしー。
メタルナイトがそんなだから、ジェノスくんがなんとかせねば！　って気合い入れてるじゃん。いや全然良いことなんだけど。
メタルナイトのフォローしようと頑張ってくれてるんだよね多分。
めちゃくちゃ良い子だよこの子。やっぱり良い子だったよ。
ただね？　あの、そんな「ここで死力を尽くす！」みたいな感じにまでならなくても……（戦慄）
あああああ！　待って待って！　まだ序盤だから！　勇者がひのきの棒もらって王城でたばっかのとこだから！　きみS級になったばかりでしょ！　そんな使命感に燃えなくていいから！　そうやって一人で抱え込んで潰れるの新人の典型だから！
もっと先輩頼って――！
そしてジェノスくんの左手から撃たれる巨大で強大なエネルギー砲。かっこいいぞジェノスくん――！
しかし止まらない巨大隕石。

エネルギーが切れたのかプスプス言ってるジェノスくん。大丈夫なのかジェノスくん!?

これはイカンと思ったね。折角の有望な子をここで潰すわけにはいかないと！　あとちょっと後輩にかっこいいとこ見せたい（見栄）

よーし！　やっぱり見栄えがいい技がいいよねー！　あと余裕そうに見える方法がいい！　そして最後に派手なのがいい！　でもかっこいいって言ったら剣だよね！　剣でスパーンと斬っちゃうとこも見せたい！

決めた！　全部盛りだー！（ばか）

そしてスタイリッシュに決める魔法！　斬撃！　魔法！　の三連撃。　うむ、決まった（ドヤァ）

うん？　魔法使えるのって？　なんか体の中にある魔力的なやつをギュッとしてハァッ！　ってやったら使えるんだよ（適当）

バングさんだって適当がベストって言ってるしそんなもんでしょ（違う）

そして驚く後輩たち。

ふふふ、悪くない心境にござる（照れ）

まあ跡形もなく壊したのはちゃんとした理由もあるんだけどね。瓦礫とかで街に被害でたらダメだし、俺に各方面から攻撃来そうだし（白目）

Ｓ級１位のくせに！　とか。ヒーローのトップがこの程度どうにか出来んのか！　とか。やっぱり仕事は出来る限りベストな結果に繋げなきゃね。

じゃないと信用信頼も落ちちゃう。童帝くんとかが向けてくれるキラキラした瞳がドブ川を見るような瞳になっちゃう。くっ、それはきつい！

ま、今回の件は無事完遂できたからその心配はないけどさ。

ここまでが隕石破壊任務についてのお話。

これまで語ったことで分かったかもしれないけど、良いことの一つはジェノスくんという有望株が後輩になってくれたこと。

そしてもう一つ。どうやらジェノスくんには先生と呼び慕っている人がいるらしく、その人がなんと俺の探し人だったのだ。

名前はサイタマくん。Ｚ市のゴーストタウン在住、２５歳のハゲ……禿頭の男性だ。職業はヒーローをやっているらしい。

ファッ!?

詳しく話を聞くとどうやらジェノスくんと同日にヒーローテストを受けて合格したそうだ。それがつい５日前の出来事。

かなり強い筈なのになぜ今時ヒーロー名簿に登録したのか。俺はてっきり興味がないか、既に手に職つけてるのかと思ってたんだけど……。えっ、プロヒーローの存在を

知らなかった？　アッハイ。
世の中には色々な人がいるんだね（悟り）
なんか色々ツッコミたいけど一つだけ。
一年以上悩んでいた俺って一体……！
しかもその時に。
「セフィロスは仕事何してんの？」
ってサイタマくんが。
あっ（察し）
やべーわー。自分で自分のことちょっとは有名人じゃね？　とか思ってたのやべーわー。自意識過剰も甚だしいね。いや、ちょっと、これはホントに恥ずかしい。
そうですよね。所詮一つの組織の実働員トップ。皆が知ってるわけないですよね。
かーっ！　やべーわー！　ホント俺って恥ずかしいわー！　これからも精進しますんで許してください！　そして私の自意識過剰は忘れてください！
でもちょっとこう、新鮮だった。というか久々で懐かしかったというか。自分で初対面の人にしっかり自己紹介するのがさ。
勿論、今までも初対面の人には自己紹介しっかりしてきたよ？　でもそれって大体は任務で一緒になる人たち（ヒーローとは言ってない）だったりなんだよね。護衛対象と

かだね。

あとは色んな企業やスポンサーの重役たち。

あっちは元々こっちのこと知ってるし、なにより仕事だし。こうやって自己紹介してお互いに距離感を図りながら、じゃあ双方のこと知っていこうね。みたいなのは本当に久しぶりなんだよなー。

クセーノ博士と以来な気がするよ。日常で日常らしいことするのは。

それから話しながら仲良くなってね。

またなー、って言いながら別れたよ。

これはもしや友達になれるのでは……。

というか、あれ？　俺って今まで友達いなかったんじゃ……。

グフッ（吐血）

いらぬ真実に気付いてしまった。この世には知らずにいればよいこともあるのだ……。

せふぃろす（２８）ちょっと限界かもしれない。

でもさー、彼すごく不思議な人だったなー。

今までに何回か戦ってる姿は見てたから、強いんだろうなー。とは思ってたけど。こうやって間近で見ると強者特有のオーラっていうの？　そういうの感じないんだよね。

ホントなんて言うんだろ。ギュッと中身が限界まで詰まってる感じ？　外に余分なものが出てないっていうかさー。完璧に内に全てを凝縮仕切って、鍛えぬいた。みたいなー？

言葉を借りると、二次元の存在が三次元の存在を知覚出来ず、認識できない。みたいな？

で、二次元と三次元を隔てる壁は力の差もあるけど、サイタマくんの薄皮一枚だよ。みたいな？

けどその薄皮一枚が次元の壁以上に厚いんだろうなー。

上手くは言えないけど、そんなことを彼に感じた。

ま、実際のとこ、誰もが彼を脅威として判断することを放棄してるんだろうなー。

目の前に「こいつ……強い！」みたいな人がいたら警戒なり何なりするだろうけど、俺からしたらそれこそアホっぽいし。

やっぱりちゃんとした強い人は強さを感じさせないんだよ、きっと。で、油断した敵を一撃で倒すと。

マンガじゃないんだからさ。やっぱそれが一番でしょ。怪人なんて特にね。追い詰められて変身とか殊更に多いし。

賞金首狩ってた時代にそれ学んでからは俺も一撃で倒すようにしてるし。

サイタマくんが一撃で倒すのもそういうことなのかも。作業みたいとも言ってたから、もしかするとそうじゃないのかもしれないけどさ。

そういえば、キングさんも同じ感じらしいね。ワンパンで一撃らしい。

彼はサイタマくんと違ってめっちゃ強面だけど。強者感バリバリだけど。でもオーラはそうでもないんだよなー。とはいえ実は弱かったです、なんてことも有り得ないし。

だってキングさん人類最強とか言われてるんだよ？　今までも災害レベル【竜】を何度か対処してるらしいし。協会がそれをしっかりデータとして記録してるらしいしね。

じゃあ弱いわけがない。

多分キングさんも強さを隠すのが上手いんだろうなー。

そう考えると今回はいい勉強になったよー。

俺ってまだサイタマくんやキングさんほど強さを隠せてない気がするし、うん。ちょっと頑張ろうかな。

今まではほら、任務をどれだけスピーディー且つ完璧にこなせるかに着目してたから。一撃の鋭さとか速度に気を使ってたんだよね。

よし、サイタマくん見てたら久々に刺激を受けたぞー。数年ぶりにやる気も出て来たしなー！

畏れ多いことにこの体はセフィロススペックなんだから、俺がここで甘んじてたらダメだよね。
おーし！　一丁やったるぞー!!
あっ……。……なんか電話かかってきた（嫌な予感）
あ、はい。もしもし、セフィロスです。えっ？　次の任務？　……。ワカリマシタ！
逝ってきます！（社畜感）

◇

サイタマとセフィロスが並んで歩いていた。
サイタマが動けなくなったジェノスを背負い、Z市の人通りのない道を進む。向かうのはサイタマが在住しているZ市郊外のゴーストタウンだ。
背負われながらジェノスは己が先生と仰ぐ男サイタマと、ヒーローの頂点に立つ男セ

フィロスの邂逅を思い起こす。
『さっきのすげーな。どうやったんだ？』
『お前は……』
『俺はサイタマだ』
『セフィロス・クレシェント。セフィロスでいい』
『そっか。で、セフィロスがやった――――』
『ああ、それか――――』
サイタマがいきなり疑問を投げ掛け、そのあとに素っ気ない自己紹介をお互いに交わした二人。少し話をすれば、何故かそのまま帰りながら話は続いていた。
二人共に話をする気がないなら直ぐに別れて各々で帰路についただろう。ということはまあ、そういうことだ。
ジェノスは何気ない話を朗らかに交わす二人を交互に見て、再度サイタマへ視線を向けた。
なんとも珍しいなと、そう思ったのだ。人の名前を覚えるのが苦手で、物臭でマイペース。興味のないことはとことん覚えないし話も聞かない。そんなジェノスが先生と仰ぐ男は、セフィロスの名前を覚えている。そして和やかに話し続けている。
驚愕する他なかった。

途中交わされた会話を聞く限り、サイタマはセフィロスがS級1位の男と知らない筈なのだから。

『そういやセフィロスは何やってんだ？　あっ俺はヒーローやってるんだけど』

『そうなのか。俺と同じだな』

『そうだったんだなー。あ、だからジェノスと一緒にいたのか――――』

明らかにセフィロスの存在を知らない発言だった。サイタマはセフィロスの中身に興味を持ったということなのだろう。何か感じるものがあったのかもしれない。

順位の話もせずに話は二転三転と転び続け。とりとめもない話を続けている。

ふと、セフィロスが自動販売機を見つけて足を止めた。おもむろに近付いて硬貨を入れると、振り返って言った。

「何か飲むか？」

「おっ、いいのか？　サンキュー」

ジェノスは断った。先生の上で飲むわけにはいかないし、なにより腕が動かないから。

プシュッ、とプルタブを開ける小気味いい音がした。

ジェノスは驚いた。

（打ち解けるのが早いだと……しかもサイダー）

あの英雄セフィロスがサイダーを飲んでいる。俗物感が皆無のセフィロスが、である。だがそれも所詮は色眼鏡で見ていたのだろう、とジェノスは頭を振った。
それにサイダーを飲んでいても特に違和感は無いように思える。会話を聞いていても思ったことだが、セフィロスはお高く止まっているような存在ではないらしい。
それどころか、少しの茶目っ気すら垣間見える。
二人が話をしながら飲み歩く姿は、中高生が友達と帰宅しているような。もしくは仕事終わりに一服しながら帰る同僚のような。そんな不思議と似合う光景に見えた。
「サイタマはけっこう鍛えてそうだな」
「まあ筋トレしたからな」
二人の会話も普通のもので、それが却って心地好い。
「セフィロスは剣使うんだよな。隕石斬ってたし」
サイタマがセフィロスの腰元に帯刀されている刀を見る。
セフィロスが柄を一撫でした。
「ああ。夢と誇りだからな」
「お前も意外と夢とかあるんだな」
「意外か？」
「だって無縁そうだし」

「フッ、そうか。お前は何か無いのか？」
「何かって、夢か？」
「ああ」
サイタマは少し考えるように缶を握る手を見つめた。
何か思うことがあるのだろう。
そんな彼を、セフィロスは何も言わず待ち続けた。
「俺さ、ヒーローになりたかったから趣味で活動してたんだ。プロヒーローってやつがあるのを知ってテスト受けて、晴れてプロにもなれたけど……。なんか思ってたのと違うんだよな。それに最近は怪人倒すのも作業みたいに思えてきてさ……。自分が成長するワクワク感とかも得られなくなってきたんだ。セフィロスはなんかそういうの感じないか？」
サイタマが抱える虚無感。
人は外部から刺激を受けるから笑えるし泣ける。成長の糧にだって、生きる力にだってなる。
しかしサイタマはいつしか、外部からの刺激を刺激とは感じなくなっていた。
自身だけが周囲と隔絶された世界にいるような感覚。テレビの向こう側の不出来なバラエティーを見ているような、そんな感覚。

つまらないことばかり。自身に影響を与えるもののない、張り合いのない日々。
いつからそうなってしまったのか。それは誰にも分からない。勿論それはセフィロスにも。
「……どうだろうな。プロヒーローなんてのはただの職業名でしかない。サイタマがなりたいのはそんな職業上のヒーローじゃなく、本物のヒーローなんだろうが……」
「じゃあ本物のヒーローってなんなんだろうな」
「そうだな……」
少し考えるとセフィロスは言った。
「魂」
「魂？」
「ああ。すごい魂を持ったやつ、だな」
「なんだそれ」
サイタマはすこし理解が難しそうに空を見上げて、再度セフィロスに問うため顔を向けた。
「じゃあ――――」
その先の言葉は放たれなかった。セフィロスが手で制したからだ。
いつの間にか歩みは止まり、ふと見回してみればサイタマの家に近付いていたよう

だ。それはつまりZ市郊外のゴーストタウンに入ったということ。
「どうしたんだ？」
「先生、生体反応です」
それまで黙っていたジェノスがサイタマへ知らせた。
住民の居なくなった街で生体反応。つまりそれは怪人の出現を知らせるものだった。
「俺がやろう」
ジェノスを背負うサイタマの様子をチラと確認し、セフィロスが言った。彼等に戦わせるわけにはいかない。そう判断したのだろう。
怪人が、現れた。
「クケケケッ！　なんだぁ？　こんなところに人間がいやがる。珍しいこともあるもんだなぁ」
ギラギラと瞳を見開かせて現れたのは、猛禽類のような爪牙を持ったウサギだった。だだし人型で筋骨隆々とした、一軒家ほどもあろうという怪人だ。
「ちょうどいい。腹が減ってたとこだ。食ってやるかぁ」
セフィロスが前に出る。ゆっくりと長刀【正宗】の柄に手を置いた。
怪人が徐に腕を持ち上げ、降り下ろした。大気を押し潰しながら迫る拳。ジェノスをして腕が霞んで見えるほどの速度。

その拳はセフィロスを捉えること叶わず。

――――居合い斬り

長刀を抜き放つと共に無造作に一振り。やはり、一振りにしか見えない。だがそれが起こした現象は目を見張る。

気付けば幾本もの光の筋がセフィロスから怪人に向けて伸びているのだ。そしてその光景の後、敵を切り裂く音が何度も周囲へ鳴り響いた。

セフィロスの太刀は、音を置き去りにした。

それを見たサイタマが、あっ……と少し間抜けた声を上げた。

そして切り刻まれ解体される怪人。それを尻目にまた何事もなく歩き始めるセフィロスとサイタマ。その日、何度目かの驚愕と戦慄を起こすジェノスは置き去りであった。

「でさ、さっきみたいに一撃で倒すばっかだと、なんか詰まらなくないか？　戦いのワクワクも感じないし、戦いの中で成長していくことも体感できない。そこんとこはどうなんだ？」

本当に何事もなかったように話し続けるサイタマ。

セフィロスはその言葉を聞いて問い返した。

「サイタマは苦戦したいし、成長したいのか」

「というか、それが楽しくてしょうがなかったんだよ。自分が一歩一歩強くなっていく感覚があってさー。でも最近はそれもないし、俺はこれ以上強くなれないんだなって」
「つまり実戦の中で強くなりたいのか。そして強くなるより、そのワクワク感が欲しい。更に、強くなった自身と対等に戦える相手が欲しい。そういうことか？」
「あー、そうだなー。うん、そんな感じかも」
「フッ、確かにヒーローものに有りがちな展開だな」
「あっ、今もしかしてバカにしただろ」
「いや、していない」
「絶対した」
「していない」
「いやした――」
「いやして――」
何度か繰り返す無駄な攻防。
なんとか軟着陸を決めてセフィロスが言った。
「なら今度、俺と戦ってみるか」
「えっ、セフィロス強いのか？」

「ああ、強い。少しだけな」
「まあ見た目強そうだもんな。ジェノスはどう思う？」
また今まで喋らなかった知識人な弟子に、意見を聞こうと水を向けた。それまでセフィロスの戦闘能力について考えを巡らせていたジェノスだが、サイタマの声に我を取り戻した。
「あっ、はい。すみません先生。何の話でしょうか」
「だから、セフィロスって強いのかなって話だよ」
少なくとも本人の前でする話ではないが、二人は気にせず話し続けた。
「はい、悔しいですが少なくとも俺よりは格上の強さかと」
「そっか。じゃあジェノスだったらセフィロスとどんくらい戦えるんだ？」
「……一合も持たないかと。そう考えれば、底の見えない強さという点で先生と同じですね」
「そっか。じゃあ戦ってみるか」
なんとも明け透けな話だった。
サイタマは強いが武術を修めているわけでもないため、強弱の判断がつかない故であり。逆にジェノスは分析が得意なこともあり、そういう結論に達したのだろうが。それでもこう、デリカシーのなさが凄かった。

「セフィロスは今からヒマ？」
「ああ、特に予定は……。すまない、協会から連絡だ」
一言断って携帯を開いたセフィロスは某かの話をしている。一つ頷いてから携帯を懐に仕舞い、サイタマたちと向き合った。
「悪いな、任務が入った。手合わせはまた今度だ」
「えー、まじかよ。ちょっと楽しみだったんだが」
「ああ、まじだ。連絡先を教えてくれれば、此方からまた連絡しよう」
「あっ、俺携帯とか持ってないから」
「では先生、俺の携帯の連絡先を渡しておきましょう」
「そうだな、じゃあそうしてくれ」
話をとんとんと決まり、連絡先も互いに交換し終えた。
「ではな。サイタマ、ジェノス……は体直しておけよ」
振り返り手を振りながら言ったセフィロスへ、また二人も言葉を返した。
「おう、またな」
「言われるまでもない」
飾らない言葉と、生意気な言葉。顔を見ずとも分かりやす過ぎる二人の言葉に、涼しく笑みを見せながらセフィロスは飛び立って去っていった。

建物を足場にして去っていくセフィロスの背中は直ぐに見えなくなった。
サイタマもジェノスを背負い直して、直ぐ近くの我が家へ向けて足を再起動させた。
背負われながらジェノスは少しの疑問をサイタマへ問うた。
「先生、失礼ながらお聞きしてもよろしいでしょうか」
「ん、なんだ？」
「先生が初対面の人物にあそこまで言うのは珍しいと感じたので。何か理由でもあるのですか？」
あー、とまたもや空を見上げて言葉を探すサイタマ。
言葉は唐突だった。
「昔さ、俺がヒーロー目指すためにトレーニングし始めた頃」
「……？　はい」
「まだ全然弱くて、怪人にボコボコにされることも珍しくなかったんだよ」
「先生にもそんな時期が……」
「それでさ、そんなんばっかだったけどなんとか勝ちは拾ってたんだ。でも一度だけ本気で死にそうになったことがあってさ。手足折られて体も握り潰される寸前で」
「そのとき先生はどうやって切り抜けようと？」
「頭突き」

「なるほど！　くっ、メモが取れない……！」
本気で悔しがるジェノスに少しだけ引きながら、サイタマは話を続けた。
「でもそんな時に助けてくれたやつがいたんだよ。銀髪のすげー長い刀持ったやつ」
「それは……」
「多分、セフィロスだ。まあ俺もその時のこと思い出したの、ついさっきなんだけどな。でも俺が誰かに助けられたの、後にも先にもあの時だけだったからさ。今日セフィロスに会ってからずっと、なんか思い出しそうではあったんだよ」
「そんなことが……。だからあれほど先生は話を？」
どこか納得がいったジェノスは頷いて、確認のような言葉を放った。
「いや違うけど」
けどサイタマはサイタマだった。
ぬぼーっとした顔であった。
そりゃそうである。サイタマが話をしていたときは、思い出そうと記憶の海を探索中だったのだから。
ジェノスが予想した言葉と１８０度反対の言葉を言い放ち、サイタマは少しだけ後付けをした。
「んー、なんていうか。あの時、本当の危機だったんだよ。そんな自分ではどうしよう

もない本当の危機にだけ颯爽と現れる姿見てさ」
ジェノスは見た。
記憶を掘り起こして、それを見て笑っているのだろう。
日向のような笑みだった。
サイタマの口が一拍のあと開いた。
「ああ、こいつヒーローだ。って思ってさ」
――――目指すヒーロー像だったんだよ
ホント久々に思い出したけどな。そう言ってサイタマはからからと笑った。
それは失っていたものを少し取り戻したような。
いつも影となっていた虚無感が少しだけ埋められたような。
そんな嬉しさが籠っているように見えた。
少なくとも、ジェノスにはそう見えたのだ。
ジェノスは理解した。
サイタマがなぜあれほどまで話をしたのか。それはサイタマにとってセフィロスが初対面の相手ではなかったから。それだけの話だったのだ。
ただ、忘れていても確かな、信頼にも似た何かがそこにあったからなのだ。昔はあったそれが、今もサイタマの中にあるのか、ジェノスには判断がつかない。だがもしそれ

に名前があるならば――

――人はそれを夢という。

災害レベル【鬼】変身後は不明

隕石襲来から早くも数日が立った。
また一つ積み上げられた英雄の功績に沸き立つ民衆も、ほとほとに落ち着きを取り戻しつつある。
当の英雄本人は次から次へと舞い込む怪人襲来の対処に当たっていたため、彼の中では一つの任務が終わった程度の認識であった。
そんな彼にとって、その日は久々の休暇が認可された。
実に一年ぶりの休暇である。
今までは増加する怪人被害、ヒーロー協会の慢性的な人不足、スポンサーや協会役員によるヒーローの私的運用等により、セフィロスに休みが与えられず。
重ねて、どれだけ働こうとも一寸の疲労すら見せず。剰え全ての任務を完璧以上に、最速で遂行してしまうのだ。
涼しい顔でそれだけの成果を叩き出し続ける彼に、分かってはいても寄りかかってし

まう協会を果たして悪と言えるか。

――ヒーローから緊急の応援依頼！　災害レベル【鬼】です！　近辺には対処可能なヒーローがいません！　……はい、分かりました！　直ぐにS級1位英雄セフィロスへ応援依頼を出します！

――シババワ様により大規模な津波が予知されました。対処はどういたしましょう。……了解。津波対処にS級1位英雄セフィロス、念を入れてS級3位戦慄のタツマキの二名。住民避難に他数十名のAからC級ヒーローを動員。

――緊急！　緊急！　災害レベル【竜】の怪人出現を観測！　対処可能なS級ヒーローは全員が現在、別の依頼に従事しています！　……！　S級1位ヒーロー、英雄セフィロスから任務完了の報告！　至急、災害レベル【竜】の対処を求みます！

以上。オペレーターの音声履歴から一部抜粋。

惜しむらくは、セフィロスのフットワークの軽さ。完璧以上の任務完遂能力。S級の中でも頂点に君臨する力量。そして何より――運の悪さ。

これ等はセフィロスの持っている、他の追随を許さぬほどに圧倒的なもの。

故に緊急の事態にはセフィロスの名前が真っ先に上がり、他ヒーローは別の怪人に対処中で手を離せないなどざらである。

はっきり言って間が悪いとかのレベルではない。狙ったようにポンポンと厄介事が

舞い込むのだ。吸引力のセフィロス。商品名に出来るくらいだ。

その上、セフィロス自身が休暇を取らずにヒーロー活動を続けているため、更に状況に拍車がかかる。セフィロス頼りが悪化するのだ。

実際のところ、セフィロス自身は多忙過ぎる余り、どうすればより効率的に早く仕事を終わらせられるかに思考が傾倒していただけなのだが……。

オブラートに包んでも社畜の鏡だった。

そんなセフィロスから初めて休暇願いが出された。

「「な、なんだとーーー!?」」

控え目に言って協会は騒然となった。

あのヒーローの模範とも呼べるセフィロスが休暇願いを出すなど、すわ何事だ!? と誰もが叫び出す。

――あのセフィロスさんが休暇を取るなんて……。

――まさか休暇をしなければ成せない重大な事態が起こっているのか……!?

――いやしかしセフィロスくんからは休暇を取りたいとしか聞いていない。理由は聞くなと言わんばかりだった。それほどの凄みがあった……!

――じゃあやはり……!?

――何かが起こる前兆かもしれん……。

云々かんぬん。

セフィロス本人が聞けば、なんでそうなるの？　と白目を剥いて問い掛けたくなるだろう言葉の数々。

セフィロスが築き上げてきた信用信頼（）の賜物であった。

本人は周囲や上役たちから睨まれたくなくて頑張っただけなのに。

協会職員たちの話は移り変わっていき、やがて目の前の問題と相談をしだす。

――彼が一日とはいえ居なくて大丈夫なんですか？

――まずいかもしれんな……。

――緊急事態が発生したとき、他のS級たちが素直に動いてくれるのか……。

――金属バットやタンクトップマスターなら即座に動いてくれるだろう。

――しかしその二人だと機動力が足りない。他のヒーローもだが、彼等だと近場の事件にしか対処出来まい。閃光のフラッシュや戦慄のタツマキがいいんじゃないかね？

――タツマキはセフィロスと同等の実力者だが、彼女の戦闘は街にも大きな被害を与えるからな。あまり動かしたくはない。

――ならば閃光のフラッシュくんかな。個人的には大型新人のジェノスくんもアリだと思うけどね。

――ふむ、一理あるな。ならばその二人に緊急の事態は任せるか。近場に他のＳ級がいればソチラへも要請を送ろう。異議はあるかな？

Ｓ級ヒーローは実力者であると同時に、内面的曲者の集まりでもある。

まず休暇願いなど出さないし、出す前に勝手に休みの日を決める。依頼要請を出しても即断で断られることは少なくない。端的に言ってフリーダム過ぎるのだ。

それもまたセフィロスが一因となっている部分があるのだが……。

何はともあれ、そんなＳ級の中で一番真面であり、英雄の名に恥じぬ男がセフィロスであった。そして協会にとっての救いであった。

依頼には断らずに即応してみせる。

しかも依頼達成率１００パーセント。Ｓ級の中では珍しくない数字だが、彼等彼女等の内情を考えればセフィロスの叩き出す数字は驚異のものだ。

故に集まる信頼。際限なく高まる信用。周囲から最高のヒーローだと認識される要因の一つとなる。

更にそれを形作る土台として、人格と能力も最高のものであると認識されている。

信用、信頼、人格、能力。これだけ揃えているというのに、外見まで端麗ときた。

まさに最高のヒーロー。民衆にとっても、ヒーローにとっても、協会にとってもだ。

ここまで語って何が言いたいかと言うと、まあ簡単なことである。

――――やばいぞ……ッ！　Ｓ級１位英雄セフィロスがいないと仕事回らないんじゃ……!?

はっきり言ってセフィロスに頼り過ぎていた。協会は以前から自覚していながらも、今回やっと身をもって知ることとなる。そしてそれは民衆も。ヒーローも。

たった一人のヒーローがいないだけで、ここまで人間は脆いのかと、愕然とするのだ。

◇

我輩、久々の休暇である。

もう一度言おう。

久　々　の　休　暇　だ　！

ヒャッホウ！　やったぜ！　やってやったぜ！　今までは休暇とるとかいう発想が時空の彼方だったけど、そういえば普通に届け出だせばよかったんだよ！

なんで今まで考えに浮かばなかったんだろうね！

……言うな。知ってる。狂ってたんだ、あの頃は（遠い目）

常に舞い込む依頼に、出した答えは仕事の効率化。どれだけ早く仕事を終わらせられるかに終始思考を割いてたんだ。

そして休んで何かする趣味もない（断言）

共に遊ぶ友達もいなかった（血涙）

でも今回はサイタマくんと遊ぶから頭絞って考えたよ！　そして奮発し休暇を取ろうと閃き、一念発起。なんとか受理されたのだ……。

休暇の理由で友達と遊ぶためとか言い出せなかったから、心の中で理由聞くな聞くなと念じてたけど、なんとかなって良かった！

職員さんが何故か深刻な顔してたのが気になったけど、何も言われなかったし気にすることないでしょ。

そして今日はサイタマくんとジェノスくんと、Z市の荒野で待ち合わせ。

なんかサイタマくんが張り合える相手居なくて詰まんないらしいから、今日は俺と手合わせをするのだ。

セフィロススペックは伊達じゃないからね！　サイタマくんを満足させるとか余裕でしょ！

や、勿論サイタマくんを舐めてる訳じゃないよ？

でもさ、ほら。セフィロススペックだから！　今の俺に死角とかないから！　なんと

かなるなる！（脳筋）
そして待ち合わせ場所へとやって来たんだけど……。ちょっと早く来過ぎたかな？
気合いを入れすぎたかもしんない。
まあ今までボッチだったからね、しょうがないね。
あっ、ちょっと自傷行為しちゃった（）
だけどそんなの気にしない！
楽しみだからさ！　ワクワクが止まらねぇ！
殴り合いで深まる友情……。
少年ジャンプ的サムシング……。
遅いぞ！　我が青春ッ!!
そして汗を掻いて握手をし、現在俺のイチオシたこ焼き店へ行き、食べ歩きながら次の予定を話し合うのだ……。
完璧やな！（フラグ）
あー、早く来ないかなー。
たこ焼き店の看板娘が可愛いからその話もしたいし。サイタマくんとジェノスくんの好みも聞きたいよね。やっぱ異性の話とか盛り上がると思うし！
一日の締めに一緒に晩御飯を食べに行くのもありだよね！　和食か、洋食か、中華か。

シンプルに焼き肉とか？　気軽にファミレスとかファストフードでもありかも！
いやでも居酒屋とかもありだな。この見た目だから一人じゃ入りづらいし、この機会にサイタマくんたちと行ってみようかな！　あっ、でもジェノスくんって１９歳なんだっけ？
居酒屋行ってお酒飲めないとか拷問かよ。
ってあれ、俺ってば食い物の話しかしてないな。
なんか会話のレパートリーが少な過ぎない？
ははっ、そういえば今生は実験と仕事くらいしか経験してなかった（白目）
賞金首で稼いでた時期もあったけど、そんな話されても相手は困るだろうし。
食事が数少ない癒しだったんだなぁ（社畜）
本当に多忙なときは食事すら満足に取れなかったし。５秒くらいしか食事時間ないときとかあったし。
なんぞそれ、１０秒チャージも出来ひんやん（）
もう本当におかしい。
怪人とかホント多過ぎだし。そんでもって災害レベル【鬼】が出るだけで緊急要請入ってー、からの市を幾つも跨いでフルマラソンだよ！
移動時間が数時間とかザラなんですよね。そして到着したら怪人を真っ二つにして、

また別の市に数時間かけて移動（白目）

俺知ってるよ。【鬼】は月一回以上のペースで出るとか嘘ですよね。

だって移動中に【鬼】くらいの強さがありそうな怪人けっこう見かけるもの。そして襲われるもの（悲哀）

絶対に協会は嘘ついてるね（確信）

そして仕事は怪人退治だけじゃないのだ。色々とあるが、一番キツイのが警護任務。スポンサーの警護とか凄いキツイんです。

なんか旅行に行くから警護してとか？　パーティー開くから警護してとか？　それ協会から断ってくれませんかねぇ。

警護に行ったら行ったでさー、警護っていうより接待させられるしさぁ。

知ってるか。俺、マダムたちとお茶会（）したりしてるんだぜ（白目）

その旦那たちと夕食を共にしたりしてるんだぜ（戦慄）

そしてその最中に今度ウチで〇〇の仕事を頼みたいのだが……とか言われちゃうんだぜ（恐怖）

仕事中の話だし、なんとか話を持ち帰って協会に報告するじゃん？　俺、やりたくないです！　って言いたいけど協会はスポンサーたちのご機嫌とりで了承しちゃうじゃん？

こうして仕事が増える（絶望）

俺の事情も、考えてください……！

でも言えない。だってこの年でクビ切られて無職とかキツイんですもの。俺の代わりなんてS級には大勢いるしさぁ。俺が使えないって分かった瞬間にポスト交代でポイ捨てですよ。

逆らったり意に沿わない行動をするのだけは避けなければ（社畜の鏡）

へへっ、笑っちゃうだろ？

こんなんだけど俺、生きていけてるよ。

クセーノ博士……取り敢えずまた助けて（懇願）

はっ！

いかんいかん。闇落ち（笑）しかけてたぜ。取り敢えず今日は遊ぼう。思う存分、心の赴くがままに遊ぼう。

そして、たこ焼き店に行って看板娘に癒されよう。

夕食にはちょっと良いものを食べよう。

金は有り余ってるから大丈夫。使う暇が無かっただけとか、そんなんじゃない。そんなんじゃないゾ（二度目）

――プルルルルル、プルルルルル

おっ、ジェノスくんから電話だ。
なんだろ？
えっ？　怪人が出たから行ってくる？
えっ、サイタマくんと一緒に行くんだそうなんだ……。
そっか、今日の予定は取り消しか……。
電話を切り、パタンと音を鳴らして閉じた。
一息つく。
ふぅ……。
……うむ、これは俺も向かうしかないな！
予定がなくなって虚しいからとか、そんなんじゃないぞ？　怪人退治した後にそのままサイタマくんたちと遊びたいからとか、そんなんじゃないぞ？
折角なんだし俺を誘ってくれてもよかったんじゃない？　とかそんなこと思ってないぞ？
よーし！
じゃあ行くか！
休日出勤じゃおらー！　（エリート社畜）

◇

海人族襲来。
災害レベル【鬼】。
数日前からＪ市にて怪人が発生していた。発生元は我等が母なる海からであった。
最初は一体のみの襲撃。災害レベル【狼】の怪人。この程度ならばＢ級ヒーローで対処は事足りる。
だがそれも最初のみ。次は数が増えた。その次は災害レベル【虎】レベルの怪人が現れた。次第に数と質を増していく怪人。
災害レベル【虎】となればＡ級ヒーローが対処しなければならないレベルだ。
ヒーローたちはなんとかその日も乗り越え、更に次の日。
またもや災害レベル【虎】の怪人発生。数体の海人族たちによる襲撃であった。

その怪人たちには偶然見回りをしていたため現場に遭遇したA級11位ヒーロー【スティンガー】が対処した。

周囲を賑やかしていた見物人たちが、疲労困憊となったスティンガーを見て我が身の危機を感じ逃げ出した中。彼は見事に孤軍奮闘の末に怪人たちを撃ち破ってみせたのだ。

彼を見守るのは上空を飛ぶヘリコプターに搭乗したアナウンサーたち。そして街の至るところに張り巡らせた協会の目を通し、現在もヒーロー協会本部にて職務を全うする協会職員たちのみ。

彼等がいたからこそ、ソレが出現したこと、そしてA級ヒーローが一撃で倒された事実を認識できた。

「ははははははははっ、おそらく災害レベル【神】くらいの怪物どもの襲撃を俺一人で防ぎ切った！　これ英雄セフィロスを超えたんじゃ!?　俺すげええええええ！」

危機を乗り越え、高揚した気分のままに叫ぶスティンガー。眼前の敵を一掃し、海人族が全滅したなどと考えているわけでもなかろうに。

つまりそれは、明確な隙だった。

ボキュ。

そんな音が鳴った。

殴られたスティンガーの体から出た音だった。骨が幾つ折られたのか。もしかすると内臓も傷ついているかもしれない。

やったのは筋骨隆々の巨漢。

人の姿に酷似した怪人だった。

「———あのね。あなた不快だから死んで構わないわよ」

２メートルを超える人の体に、魚類のヒレを思わせる耳。口腔には鋭い歯牙が生え揃っている。

頭頂には王冠を被り、鎖骨から背へと身の丈ほどもあるマントを帯する。

それはまさしく王の出で立ち。

他の海人族のように、魚類と人を組み合わせた怪物そのものの姿ではない。どこまでも人に似通った姿であった。

唯一、人との大きな違いは肌の色。そして先も述べたヒレのような耳くらいだろう。

彼の名前は深海王。

海を支配する者たちの頂点であり、陸地の全てをも手に入れようとする傲慢な侵略者だ。

彼が現れ、Ａ級１１位ヒーロー【スティンガー】が一撃で破れ去ったため、協会からは災害レベル【鬼】の怪人であることが改めて市民やヒーローたちへ伝えられた。

災害レベル【鬼】。それ即ち、街全体の機能が停止、もしくは壊滅の危機であるということ。

Ｊ市の住民は核兵器さえも防ぐ避難シェルターへと逃げ込み穴蔵を決める。力の及ばぬヒーローも幾人か紛れているが、それもまた懸命な判断であろう。

Ｊ市外のヒーローたちは自発的に救援、もしくは手柄目的で向かう者。協会から要請を受けて救援に向かう者に別れていた。

そしてスティンガーを救援するためやって来たヒーローがここにもいた。

深海王から離れたビルの屋上に身を伏せ、コンパクトに折り畳める望遠鏡で戦場を俯瞰する男。

「……ちっ、倒れてるのはＡ級のスティンガーっぽいな。間に合わなかったか」

Ａ級２０位ヒーロー【イナズマックス】現着。

「でも残りは一匹か？　ううむ……応援を待つべきか。……いつもならＳ級のセフィロスが応援に来ている状況なんだが、今日に限って休みとはな……」

セフィロス休暇の報は多くの人々が認知している。ヒーロー協会がヒーローたちに英雄の不在を知らせ、その上で発破をかけたためだ。

そして誰がリークしたのか、ニュースにて報道されている始末。英雄不在の一日は大きなネタとなっていた。

本人はそれを知らないのだが。

「……タイマンならいけるか？」

本来ならばＡ級の対処可能な災害レベルを超えているのだが、あくまでも災害レベルは災害レベル。基準でしかない。

Ａ級の中でも限りなくＳ級に近い実力者は存在するし、Ｓ級としてやっていける者も存在する。

ヒーローランクや順位自体、ヒーローの実力を表すものではなく、複数の要素で決まっているものだ。実力はその複数の内の一つでしかない。

つまり、ヒーローの順位がイコールで実力ではないのだ。

故にもしかすると、Ａ級２０位ヒーロー【イナズマックス】も災害レベル【鬼】の深海王に勝てるかもしれない。

タイマンならいけるかも、とイナズマックスが思っても誰も否定は出来ない。

怪人たちも災害レベル【虎】や【鬼】等でランク付けされて一括りにはされているが、その強さの幅は同じ災害レベル内であっても大きく広いのだから。

まあ、今回に関しては――

「くぁせｄｒｆｔｇｙふじこｌｐ!?」

――どうやらイナズマックスでは対処不可能なようだ。

いつ移動したというのか。イナズマックスの背後数センチに屹立していた深海王に驚愕し、理解不能の言葉を羅列する。

直ぐ様、振り向き様に火薬仕込みのシューズを用いて強烈な蹴りをお見舞いするも、深海王には毛ほども効果が無さそうだった。

痛いじゃない、なんて話す深海王は余裕綽々だ。

一瞬で彼我の実力差を感じて逃げに徹するイナズマックス。その判断は彼の確かな実力故。

しかし隙を見つけるためとはいえ、投げ掛けた言葉が不味かった。

「俺は…ヒーロー……イナズマックスだ。……勝負しろ」

そして気付けば殴り飛ばされていた。

「勝負ね、いいわよ」

拳を振り抜いた後に宣う深海王。

その顔に浮かべる笑みは嗜虐心の表出。

ビルの屋上から殴り飛ばされたイナズマックスは己の死を確信し、四車線の道路を挟んで向かいのビル内部へ叩き付けられた。

「……ヴぐッ」

（くそっ、セフィロスがいないだけでこんな直ぐに死にかけるのかよ。いつもなら怪

人真っ二つにしてるころだろうに。他のＳ級は何やってんだ。……ああ、息が出来ねぇ）

悪態を心で吐き出し、現状まだ生きていることを確認するイナズマックス。体の感覚はなく、動くことも出来なかった。

そこへ響く、連続した重低音。

ビルを破壊するために深海王が梁を破壊したのだ。

なんとか逃げるため、死力を振り絞り立ち上がるイナズマックス。

「くそ……」

目の前に、深海王が立っていた。

「嫌な野郎だ。ぶっ飛ばしてやるッ」

「うふふ。ぶっ殺してあげる」

窮地だからこその啖呵を切り、それ以上に現実的な言葉がぶつけられた。

一世一代。

命を賭けた男の勝負。

渾身の必殺技を繰り出した。

見事に的中させた。

そして――顔面を深く殴打された。

またもやビルを突き抜け吹き飛ばされ、しかし既にイナズマックスの意識は途切れていた。
そしてイナズマックスを潰すためにビルが倒壊する。
だが更なるヒーローが駆け付ける。イナズマックスはそれだけの時間を稼いだ。
たったの数分にも満たぬ時間だったが、それはとても大きな功績だった。
「S級ヒーロー【ぷりぷりプリズナー】。あなたに会いに脱獄成功！」
イナズマックスをギリギリで受け止めて救った男は高らかに名乗りを上げた。
その威容。深海王にも負けぬ筋骨隆々な巨体。だというのに囚人服。その上から手編み感満載のハートのセーター。
遂に、S級ヒーローが現れた。
その存在感は確かにS級だった。
S級ヒーロー。
災害レベル【鬼】に一人で対処可能。それがS級ヒーローとして必須な実力の最低限。
ぷりぷりプリズナーもまた、その基準を満たしている。
そして共にいる男がもう一人。
名を【音速のソニック】。自身を最速最強と信じて疑わぬ忍者。サイタマをライバル視する男だ。

そして頭痛が痛いみたいな名前のため、比較的常識のある者に侮られがちな男だ。
だがその実力はヒーローではないものの、S級と遜色のないレベル。
確かな強者が二人。
だが彼等が力を合わせることはなかった。
ぷりぷりプリズナーがソニックに下がるよう言ったからだ。
「ジェノスちゃんに抜かれて最下位になってしまったが、俺はS級ヒーローだ。二人のようにはいかないぞ！　懲らしめてやるッ」
堂々とした口上
自信の漲る瞳。
勝利を夢魅させる覇気。
彼の背にいる者はこの上ない安心感を抱くだろう。
「まずは半分程度の力で様子をみようか！」
臨戦態勢へと移行するぷりぷりプリズナー。
彼の肥大な筋肉は更に隆起する。そしてビリビリビリ！　と絹布を引き裂くような音が鳴った。彼のセーターから聞こえる音だった。
「だあああああああああッ!?　彼氏の手編みセーターが破けたあああ!?」
うっかりだったのだろう。日常生活では珍しくないことである。何かに集中したり

熱中したりすれば、より起こりやすい事柄だ。
にしても、ぷりぷりプリズナーの叫びは凄かったが。
「あああああああああああああッ！　あなたは絶対に許さあああんッ！」
怒りと悲しみから発狂しかけるぷりぷりプリズナー。はっきり言って清々しいほどの責任転嫁であった。
（はっ!?　恐ろしい奴だ……）
戦慄するソニックの気持ちは仕方ないものだろう。
だがそんなぷりぷりプリズナーとソニックに構わず舌嘗めずりをする深海王。
「美味しそうなお肉。上物ねぇ」
気付けば、ぷりぷりプリズナーは正面から深海王の拳を受けてしまっていた。
だが流石にS級。彼は即座に反応し殴り返した。
頬に一撃。更に腹部に一撃。
その強打に深海王の体は吹き飛ぶ。
が。
「効いたわ。少しね」
「こっちも効いた。少しな」
全く効いていなさそうな深海王。それに比べ、ぷりぷりプリズナーは体幹に支障を来

すほどのダメージを受けてしまった。
恐らくもう、いつも通りのパフォーマンスは発揮出来ないだろう。
ぷりぷりプリズナーの受けたダメージは大きく、体のバランスが取れなくなるほどに重いものだった。
強がってはいるが、かなり危うい状況だ。
故に必然。
彼は全力を出すと即決する。
「仕方ない、変身するか。覚悟しな。変☆身!!」
――――ぷりぷりプリズナー、エンジェル☆スタイル
それは目を釘付けにされる光景だった。気付いた瞬間に目を反らしたくなる者もいるかもしれない。
筋肉を隆起させ、服は弾け飛び。彼は生まれたときの姿に戻ったからだ。
結論。彼は裸だった。
ぷりぷりプリズナー曰く、その姿を見て生きて帰ったものはいないらしい。
ソニックは帰りたくなった。
深海王は醜いと思った。
「醜いわね……」

というか口に出た。
「遺言はそれだけか！」
走り出すプリズナー。
彼は跳躍し両腕を広げる。
それはまるで翼のよう。見る者にそう幻視させるほど、華麗であった。それだけ何度も繰り返された動作だったのだろう。
――――エンジェル☆ラッシュ!!!
そして繰り出される怒涛の連撃。
人類の中でも上位に入るプリズナーの腕力を以てして放たれるラッシュは、アスファルトの地面を豆腐か何かのように軽く破壊してしまう。
そうして巻き上がる粉塵。
何度も放った拳は確かに深海王へと直撃していた。
だというのに。
「連打は終わりかしら」
煙が晴れた先から、両腕をクロスに組んで耐えきった深海王が現れた。
「効いたわ…少しね」
事実だ。

深海王には、彼等にそう思わしめるだけの余裕があった。
深海王が拳を放つ。
プリズナーは避けることが出来なかった。連打を終えて息が上がっていた、その疲労の間隙を縫われたのだ。
腹部に一発。
右腕に一発。
背中へと突き抜けるような一撃と、腕をへし折る一撃だった。どちらも強烈な拳撃だ。
プリズナーは余りの拳の重さに体を硬直させた。
そしてそれを狙っていたのだろう。
深海王は初めて確かな構えを取った。
「連打っていうのはね、相手を確実に仕留めるように、一発一発殺意をもって打つのよ。こんな風に……」
構え、軋む筋肉。
それが解放された瞬間。
深海王の拳が――掻き消える。
一瞬にして打ち込まれる数十発の拳。

プリズナーの荒々しく力強い拳とは違い、深海王のそれは何処までも洗練された連打であった。
無駄を省き、力を集中させる。
そうして放たれたのは破壊するような拳撃ではなく、刺突のような鋭い拳。
プリズナーは全身余すところなく滅多打ちにされ、最後に深海王が放った蹴撃により吹き飛ばされる。視界から消えてしまう程に飛ばされてしまった。
それを見ても物怖じしないソニック。
彼もまた、ヒーローではなくとも人類の強者の一人。その実力はS級ヒーローと遜色ないもの。
積み重ねた修練による確かな実力と自信が彼にはあった。
「ヒーローではないがお前を駆除してやろう」
ポツリ、ポツリと。
空から恵みの雨が振りだした。
「雨、降ってきたわね」
繋がらない会話。
それは意図したものだったのか。
深海王はパワーに秀でたS級ヒーロー【ぷりぷりプリズナー】を打ちのめした拳で、ソ

ニックへと襲い掛かる。
降り下ろした拳は地面を砕き、深く抉る。
速度に圧倒的な自信を持つソニックは容易に回避するも、更なる追撃。それすら回避し、またもや追撃する深海王へカウンターの一撃。
――――風刃脚!!!
深海王の顔面へ直撃したソレは、まさに刃のような蹴りであった。
「深海王……貴様の動きは完全に見切った。俺が貴様に負ける要素はない」
ソニックは笑みと共に宣言した。深海王に対して、自身が上位者であると確信したような笑み。
しかし深海王、無傷。
「なに言ってるの」
深海王は言葉と同時に更なる攻撃。
人では成し得ぬ攻撃を放った。
「体内ウツボ。噛んだらはなさないわよ」
食道を通って口から姿を見せたのは、長く太く、凶悪な牙を持つウツボ。
それがソニックを食い千切ろうと迫った。
だが空振り。ソニックからすれば予想外の攻撃だったが、腹部の布を失っただけで

あった。
続く二人の攻防は、深海王が攻めに攻め、深海王を凌ぐ速度でソニックが回避し攻撃を加えるというもの。
深海王も遅いわけではない。ただソニックが速さに秀でていたという話。
展開は一方的であった。
だが、互いに千日手でもあった。
ソニックは全ての攻撃を回避し、深海王に洗練された技を当てる。しかし深海王にそれほどのダメージなし。
情勢は続いていくかに思われた。が、それが変わり始めた。何も唐突なことではなかった。
雨だ。
降り注ぐ雨が深海王に真の姿を取り戻させたのだ。
正しく恵みの雨であった。ただし、深海王にとっての、と注釈が付くが。
いつしか人に似通った姿の深海王は、魚類の特徴が目立つ姿になっていた。
元々の巨躯であった身体は、更に大きく。
鋼のようであった外皮は、更に硬く。
パワータイプのS級ヒーローを完封せしめた筋肉は、更に太くはち切れんばかりだ。

異形の姿、とは言えない。
どちらかと言えば、人間の天敵たる上位生物。そう言った方がしっくりくる。
その真の姿へ回帰した深海王を前にソニックは。
（速い。でかい。強い。だが俺が負ける要素は……）
雨で濡れた顔に、どこか冷や汗を流しているように感じるのは見間違いだろうか。
攻防は続いていく。
だが先程まで少しは効果のあった攻撃が全く通用しなくなっていた。
ソニックの素手による攻撃は、深海王の硬質な外皮を打ち破れなかった。
ソニックは決断した。
深海王を倒すための武器調達を。
それ即ち、一時退却。
「そこで待ってろ……。次会うときが貴様の最期だ」
そして掻き消えるように、深海王の視界から瞬時に見えなくなるソニック。
ソニックにダメージはなく、無事に退却できるだけでも、彼がどれ程の強者か分かろうというもの。
「消えた……ま、いいわ。雑魚は放っておきましょ」
深海王は歩を進める。

住民も、彼等を守るヒーローも居なくなった街の中を。
そして、そんな深海王に近付く影があった。幾つもの巨大な影が、深海王に向かって歩を進めていた。
深海王はそれに気付いているのか、いないのか。気にした風もなく、歩み続ける。
そうして辿り着いてしまった。
居なくなった住民たちが集まる場所へ。
そこは核兵器さえ凌げる巨大シェルター。住民たちが一同に集まってしまった災害避難所。
深海王にとってそこは――格好のエサ場だった。
大きな破壊音と共に、災害避難所の隔壁が崩れ去る。
「はじめまして。さようなら」
その言葉がジョークなら良かった。だが誰もそうは思わない。
顔を青褪めさせ、瓦礫の上に立つ深海王を見上げることしか出来ない。
兎の檻に虎を入れれば、その末路は想像に容易いのだから。
「…セフィロスがいてくれたら」
「英雄さえいればあんな奴…」
「でも、今日は……」

「結局、頼りになるヒーローなんていないんだ…」

住民たちは呟く。

脳裏に浮かべるのは、いつも颯爽と現れて怪人を斬り払い、名乗りもせずに姿を消す涼やかなヒーロー。

口数は少なく、直ぐに姿を消すためファンサービスは少ない。だがそれを嫌味に感じさせない華がある。そんなヒーローの姿。

これまで住民たちは怪人が現れても危機感を感じなかった。近くのヒーローが対処するから。ヒーローが倒されても、すぐに彼が現れるから。

自分たちはその光景を見て、スリリングな映画か何かのように、気分を高揚させて騒いでいればいい。

――それが当たり前だと思っていた。

ヒーローがいないのはこんなにも恐ろしく、絶望的なことなのだと、今になって気付いた。

セフィロスでなくてもいい。心の拠り所となれるヒーローは、今ここにいないのか。

ヒーローでなくてもいい。寄り掛かれる何かは、今ここにないのか。

誰もがそう思ってしまった。

「うふふ。セフィロス、知ってるわよ」

深海王が愉しそうに口を開いた。
「天空王や地底王たちも皆知ってるわ。だから私も知ってるの。警戒すべき唯一の人間だから。そしてそのセフィロスが今日だけ居ないのも、私は知ってるわ。うふふふふ。だから今日攻めることにしたの。あなたたちって本当にバカみたいだから、私からも言ってあげる」
少しの希望に縋る住民たちへ。
それを的確に見抜いた深海王はメッセージを送る。
アリを踏み潰して笑う子供のように。心底面白いと嗤っている顔、声音で。
「――――セフィロスは来ないわ。来たとしてももう遅い。あなたたちを人質にして、嬲り殺してあげる」
突然、猛る雄叫びが響いた。聴くものの身体を振動させ、恐怖させ、動きを強制的に止めてしまうような雄叫び。
「遅いわよ、あなたたち」
深海王が誰かへ声をかけた。雄叫びを上げた者たちへかけるような声。
それに答えるように、雄叫びを上げた者たちが姿を見せる。
――――終わった
それは、新たに姿を現した者たちを目にとめた、住民たちの心境であった。

何故なら深海王の直ぐ背後に現れたのが、深海王の仲間だったから。
なんといったか。
そう。その者たちは――海人族。
王の背後で控える海の戦士たち。
まさしく捕食者。人の天敵たちであった。
ここ数日間で現れた海人族は十体にも満たない。恐らくは斥候だったのだろうが……。

今回は約百体にも及ぶ海人族が現れた。
住民たちからは瓦礫の山があるため数体しか見えていないが、先程の雄叫びはその何十倍もの海人族が現れたことを容易く想像させるに足る。
まだギリギリで、セフィロスでなくともいい。他のヒーローが駆け付けてくれるかもしれない。そう思っていた住民もいただろう。
だがこの物量差。一人二人のヒーローが駆け付けたところでどうなるというのか。
S級ヒーローを弱体化した状態で圧倒した深海王もいるというのに。
更には住民たちを守りながらの戦いとなる。
少なくともS級ヒーローが二人以上必要になるだろう。
もしくはS級の中でもキング、タツマキ、ブラストならば一人で蹴散らしてくれるか

もしれない。
希望はまだ残っている。
だが余りにも細過ぎる希望だ。
そんなものに命運を任せられるほど、住民たちの芯は強くも、硬くもなかった。
目に見えない希望よりも、目に見える絶望の方が圧倒的だった。
住民たちの心を闇で覆う程度には。
「……最下位とはいえ俺もＡ級の端くれ。何もしないよりは、少しでも抗ってやる。……お前たちはその間に逃げろ」
一人の男が住民たちの前に出た。
「ヒーロー……？」
「…見たことあるぞ」
「Ａ級の……でも一人じゃ……」
男、Ａ級３８位ヒーロー【蛇咬拳のスネック】という。
彼はＡ級で最下位のヒーローだ。だがその実力も最下位とは限らない。攻防どちらにも安定性をみせる武術を駆使し、過去に退治した怪人の皮で作られた防護性の高いスーツを纏う。
その戦闘力はＡ級の中でも低いものではない。

また、武術を駆使して戦う者は近接戦闘や人型との戦いで真価を発揮するため、今回の相手はスネックにとって戦いやすいだろう。
地力の違いすぎる深海王を除いて、だが。
そんなスネックの登場に、住民たちは俯く。暗い表情は変わらない。
住民たちは理解しているからだ。そしてスネック自身も。
『A級が一人で戦ったところで状況は変わらない』と。
だがその中で、スネックの登場を見て、言葉を聞いて、奮起する者たちがいた。
「はあっ！」
気合いで己を叱咤しながら飛び出す男が一人。
B級ヒーロー【ジェットナイスガイ】。
「う、うおお！　俺もやるぜ！」
恐ろしさを噛み殺し、上着を脱ぎ捨てた男が一人。
C級ヒーロー【ブンブンマン】。
「お、俺もヒーローだ！　オールバックマン参上！」
ヒーローたちが歩み出る中、その勇気に当てられ声高らかに名乗る男が一人。
C級ヒーロー【オールバックマン】。
そして――――

「お前たちが海人族か。――排除する」
――災害避難所の窓ガラスを突き破り、威風堂々と登場した男が一人。
S級17位ヒーロー【ジェノス】。
ジェノスは言うが早いか、不意打ちとも言うべき速度で深海王を親玉と判断し攻撃。
頬に拳を叩き付け貫き、そのまま体の内部へと焼却砲を掌から撃ち込んだ。
深海王によって破られた避難所の隔壁は、ジェノスの焼却砲により更に大きく崩壊し。直線上に存在したアスファルトもビルも抉り、海人族の数体をも巻き込んで深海王を吹き飛ばした。
「敵は……今のが親玉か?」
住民たちの絶望を、図らずも吹き飛ばしたのだ。
その光景は今まで俯くばかりの住民たちに、確かな希望を与える。
今まで見えなかった希望。目の前を覆う絶望。それらが見事に反転したのだから。
「お……おおお!」
「大型新人のジェノスさんだ!」
「S級のジェノスが来てくれた……!」
「五人のヒーローが集まったんだ!」
「助かる……!　助かるぞッ!」

それは住民たちの前に歩み出で構えていたヒーローたちも変わらない。
「すげえ……。こりゃ心強いぜ！」
「ああ、なんとかなるかもな！」
「いける…いけるぞ！」
しかし一人。その豊富な経験と、深海王との実力差故に要警戒を続けていた男がいた。
スネックだ。
彼は現在この場での年長者。それは実年齢でも、戦いの場に身を置く者としても。
だからこそ出た言葉だった。
「油断するな！　奴はまだ生きているぞ！」
スネックからジェノスへ飛ぶ鋭い助言。
ジェノスは反射的に意識を深海王の方向へ向けた。かなり遠くまで吹き飛ばしたのだが、そちらに深海王の死体はなかった。
むしろ姿は弱体化した状態になっているが、まるで堪えた様子がないように立ち上がっていた。
そして――姿が掻き消えた。
「ッ!?」

いや、ジェノスにはその姿が見えていた。
ジェノス自身にも劣らぬスピードで此方へ向かっているのだ。
そしてそのままジェノスの前まで戻り、豪腕を振るった。
見えていれば対処は容易い。
バックステップで深海王の拳を回避し、ヒーローたちの元まで飛び退く。
「どうだ。奴とやり合えそうか？」
スネックがジェノスへ素早く問うた。
「お前は……Ａ級３８位のスネックか」
スネックを視認し、少し考えてからジェノスは答えた。
「今のまま一対一ならば勝つことは可能だろう。だが……」
周囲に視線だけを這わせれば、そこには百にも及ぶ海人族が。
「分かった。何処までやれるか分からんが、出来る限りの足止めをしよう」
スネックが冷や汗を流しながらも即答した。
分かっている。己が力不足を。
知っている。ここが死に場所だと。
だがそれ以上に、もう逃げる気はなかった。
避難所に逃げ込み、安堵していた己を恥じているのだ。

そして、避難所へ姿を現した怪人たちが住民たちを絶望させ、それを見て奮起した己を自覚したのだ。
彼等を救いたい。
俺もヒーローだ。
なにより。
（セフィロスの背が眩しすぎて、弱い自分を諦めていた……。もう、止める時だ。……俺もなるんだ、ヒーローに……！）
瞳に決意を顕とす。
「お前たちもヒーローなら力を貸せ」
スネックはジェットナイスガイ、ブンブンマン、オールバックマンへ声をかける。
共に死ね。そう言っているのではない。
ヒーローならば、戦え。
そう言っているのだ。
恐くても、力が及ばずとも、例え死ぬしかないような戦場でも。
ヒーローならば、立ち上がらなければならない。
「俺たちは……」
「はっきり言っておくが、死ぬ確率は高い。お前たちでは力不足だ。嫌なら逃げろ」

ジェノスが冷や水を浴びせるように言った。
スネックが退く気がないのは見て分かる。覚悟の上だろう。
ジェノスとしても、一人であれだけの数の対処は難しい。深海王がいるからだ。
故に手を借りたい。
少なくとも深海王を倒すまで、少しの時間でいい。海人族たちに手を出させないように頼みたいのだ。
しかし数が数。
深海王さえ倒してしまえば、ジェノスの焼却砲で焼き尽くせるだろうが……。それまで彼等が生き残れるかと言えば、否と言わざるを得ない。
「……俺はやるぜ」
ジェットナイスガイが、声を上げた。
「あんたと同じで、サイボーグだから死ににくいしな」
ニヤリと笑った。無理矢理に自身を奮い起たせている。
「……くそォ！　お、俺だって囮くらいなら出来る！」
ブンブンマンが青褪めた表情ながら前に進み出た。
「俺だって……ヒーローだ！　やってやるッ！」
オールバックマンは決然と拳を構えた。

その顔にはスネックにも似た何かが宿っている。
ここに真のヒーローが集った。ヒーローの心を持ったヒーローたちが。
彼等五人は力を合わせる。
そこへタイミングよくかかる声。
「盛り上がってるとこ悪いけど、そろそろいいかしらぁ？」
深海王だ。
怒りを耐えている様子の深海王が、傷を修復し終えて話しかけてきた。
傷を癒すために都合が良かったため、これまで静観していたのだ。
雑魚が増えたところで結果は変わらない、と。
「あなた、さっきはやってくれたわね。まあ、もう治ったけど。でも、キレたわ。グチャグチャにしてあげる」
遂に今日、幾度目かの戦いの火蓋が切って落とされる。
戦士たちが、一斉に構えた。
「シェルターから逃げ出せる者は今すぐに行け！　俺たちが勝てるとは限らない！俺たちが奴らの相手をしているうちに行け！」
ジェノスの言葉に、住民たちが悲鳴を上げながらも走り出す。激しい戦いの予感を感じ取ったのだ。

「逃がさないわよ……。一匹もねぇ！」
深海王の言葉と同時に散開しだす海人族たち。
それが、この戦いの幕開け。
ジェノスが飛び出し深海王に突撃する。
スネックたちが海人族たちの意識を此方へ集中させるため走り出す。
戦いは、終わらない。

◇

スネックたちは数多の海人族の群れへ飛び込んだ。と同時にそれぞれが手近な海人族へ攻撃を加える。
C級のオールバックマンとブンブンマンはダメージらしいダメージを与えられず。
B級のナイスジェットガイはダメージを与えてはいるものの、大きな傷ではなく。
唯一、A級のスネックのみが一撃で海人族を一体撃破していた。

「お前たちは回避に専念しろ！　攻撃は余裕のある時だけでいい！　隙を突こうなどと考えるな！」

一瞬でそれぞれの能力をある程度把握したスネック。

彼は瞬時に指針を示した。

「俺たちがすべきは怪人たちの注意を惹き付けること！　ジェノスや住民たちへ怪人を向かわせないことだ！」

喉笛を振動させながらも攻撃と防御、回避を行うスネック。

スネックの予想では、オールバックマンとブンブンマンは戦力外。だが敵の注意は引ける。

彼等でも的確に急所を攻撃すれば、海人族に痛手を与えられるだろう。だがそれほどの戦闘技術はなさそうだった。

仮に攻撃できても、海人族が黙ってそれを食らうとは限らず。むしろその隙に他の海人族から攻撃を受けて行動不能にされかねない。

海人族は幸い、パワーに秀でるタイプのようだ。一撃は重いが、スピードは其れほどでもない。

あの二人でも回避に専念すれば、数体程度なら問題ないだろう。

現に二人で死角をカバーしながら、囲まれないように立ち回っている。

ジェットナイスガイは一撃で倒せる程の能力はないが、それなりにダメージを与えている。
強力な兵器を搭載してはいないが、サイボーグ故の精密な攻撃と人間以上のパワー、スピードでなんとか戦いになっている。
相性が良いことも理由の一つか。
もし一対一ならば打倒できていたかもしれないが、今回は倒すにしてもかなり時間が掛かるだろう。
回避をしつつもヒット&アウェイで海人族とやり合うジェットナイスガイ。
海人族も彼を無視できず、それなりの数が彼を狙っている。
スネックはそれを見つつ、自分たちを無視して行こうとする隙だらけの海人族を撃破していく。
相手が隙だらけだからこそできる大技の連発だ。
それに気付いた海人族たちに囲まれそうになっても、海人族にはない武術を駆使した技で撹乱し、抜け出す。
すれ違い様に少しずつ攻撃を加えていく。
敵は動きが鈍くなり、疲労は加速度的に増していくだろう。
そうして元々の遅い動作が更に鈍くなった海人族たちを置き去りに、他の三人へある

程度加勢して瞬時に離脱していく。
オールバックマンとブンブンマンは何度か危ない場面もあったが、スネックが逃げ道を作ることで事なきを得た。
ジェットナイスガイは二人より安定してはいるが、少々勇み足な部分が見受けられるため少し危ない。此方も小言と共に助太刀を行った。
更に加勢に行った際には海人族へある程度のダメージを負わせることも忘れない。
そうすることで、ダメージを与えられないオールバックマンとブンブンマン。ダメージは与えられるが致命傷には程遠いナイスジェットガイ。この三人の有利な戦場となる。
また、スネックの負わせた傷を狙うことで、彼等にも海人族を倒せるチャンスが生まれる。
総じて、戦況を徐々にヒーロー側へと傾かせることが出来るのだ。
海人族に対して優勢なスネックだからこそ出来る活躍だ。
ナイスジェットガイもそのお陰で徐々に優勢となり。オールバックマンとブンブンマンも攻撃が少しずつ通じるようになり、危ない場面も減少していく。
それはヒーロー側の気炎を燃え上がらせる。
「うおおお!」

「オールバックマン！　後ろだ！」
「へっ、ノロマが！　そんなんじゃ俺は倒せないぜ！」
しかし一人。この戦況を作り出すために幾つもの無茶を重ねたヒーローは危うい状況であった。
「ハァッ……！　ハァッ……！」
スネックの獅子奮迅の働きは、それだけの体力を消耗させていた。
自分たちを無視して住民やジェノスの元へ向かおうとする海人族を一撃で倒し。
他のヒーローの加勢を行うため戦場を走り回り。
常に戦場を把握するため意識を広く張り巡らせ。
その両腕は海人族へ休む暇なく振るわれ続けた。
海人族の数が数なだけに、ヒーローたちも傷を受けてはいるが倒れるほどではない。
が、スネックだけは傷に加えて体力の消耗も無視できないものとなっていた。
スネック自身に意識を割いていない海人族を倒し続けた成果として、当初は百ほどいた敵も三分の二にまで数を減らしていた。
だが、まだ三分の一しか倒せていない。
このままでは疲労の濃くなったヒーローたちが攻撃を回避仕切れず倒されるか。それとも体力が尽きて膝を折ることになるか。

そうなる前に、と。
スネックは願った。
ヒーローがヒーローへ。
住民を守るため、同じ志の下戦うヒーローへ。
「頼むぞ…S級ヒーロー……！　いや、ジェノス！」
――だが現実は非情であった。
長く感じる戦闘時間。
どれだけの時が経ったのか。未だにジェノスが駆け付けることはなかった。
あれから戦い続け、海人族はヒーローたちが邪魔だと思考を一致させたらしい。
ジェノスや住民の元へ向かおうとする者たちはいなくなり、攻撃は更に集中化、熾烈化した。
すでにオールバックマン、ブンブンマン、ナイスジェットガイは倒れ、スネックも限界。
海人族にダメージは与えている。血を流させてもいる。敵も体力の消耗を無視できない程に疲弊している筈だ。
だが、人と海人族では元々のスペックに差があった。その差を覆し、人の領域を越えた者たちをS級ヒーローと呼ぶのだが、スネックは未だにS級の領域には届かない。

――――ジェノスは、来なかった。
それでも四人のヒーローは逃げなかった。
降り続ける雨の中、薄々考えていた可能性から目を逸らすことなく。
（ジェノスは苦戦をしているか……それとも敗北したか）
満身創痍のスネックが思い浮かべるのはジェノスの言葉。そして深海王の恐ろしい姿。
あのときジェノスが攻撃したことで体の水分が蒸発してしまったのだろう。恐ろしい姿から、人に近い姿へと変わっていた。
ジェノスはそれを知っている。当たり前だ。ゼロ距離でジェノス自身が攻撃したのだから。
そしてだからこそだろう。
『今のまま一対一ならば勝つことは可能だろう』
おそらく『今の状態のまま一対一で戦えば勝てるだろう』と言ったのは。
そして。
『俺たちが勝てるとは限らない』
住民たちへ避難所から逃げるように言ったとき、確かにそう言った。
深海王が再び恐ろしい姿へと変わったとき、ジェノス自身が敗北するかもしれない

と、そう考えていたからだ。

スネックはその可能性が十分にあるとは思っていたが、もしそれが事実であったとしてもジェノスを謗る気はなかった。

それはコンクリートの壁に叩き付けられ、生死の分からないオールバックマンとブンブンマンも同じだろうと思う。勿論、腹部を貫かれてしまったナイスジェットガイだって。

スネックたちはヒーローだ。ヒーローであることを選んだ。

だからこそ、やることは変わらない。例え自分たちの敗北が確定してしまったとしても。

ジェノスの勝敗は分からない。

――だがここにいる海人族たちを見逃すわけにはいかない。住民たちを再び絶望させぬために。

――次のヒーローたちが来るのなら、一体でも海人族を減らしておこう。彼等の負担を減らすために。

――そして敗北する定めであっても逃げない。最期の時までヒーローであるために。

スネックは戦う。

戦って、戦って、戦い続けて。

そして、遂に……限界が訪れた。
避けきれぬと判断した攻撃を、持ち上げるのも億劫な腕で受け流す。平時ならばなんてことのない、力を受け流す技術。
だが疲労からか、体力が尽きたのか。
力を受け流し切れず、体は硬直し、衝撃に耐えきれなかった足が膝を着いた。
今までにないほど酷使し続けた足は、スネックの意識から離れてしまった。
そこへ殺到する数多の海人族の、恐ろしい力を秘めた攻撃。
スネックはそう感じながらも、目を逸らさなかった。
何がそうさせるのか、自分でも分からなかった。
瞳に光を堪え、真っ直ぐと前を見据えるスネック。
そんな彼に苛立ちを感じたのか、勝鬨とは似て非なる雄叫びを上げる海人族たち。
攻撃がスネックに当たる。
一片の抵抗すら出来なかった。
だが、自然と笑みが溢れた。
吹き飛ばされ、体は歪に曲がり、奇怪な音を立てているというのに。
意識はすでに、消えようとしているのに。
悟ったからだ。

憧れたヒーローとは、どういうものか。
（ああ……当然だった。俺がここ止まりだったのは）
攻撃を受ける直前、確かに見えた。
犇めく海人族たちのその向こう。
少し前に見た、光る頭部が。
自分たちは敗北したのではない。勝利したのだ。
抱いていた確信が、クルリと裏返った。
ヒーローたちは、繋げた。
確かに、届けた。
ヒーローは、しかとバトンを受け取った。
倒すだけがヒーローではなかった。
守るだけがヒーローではなかった。
（憧れるだけでは見えなかった……。だが今なら確かに見えたぞ、セフィロス）
彼の英雄は休むことなく戦い続けてきた。
それを得点稼ぎだと謗る者がいる。
協会の犬だと嘲る者がいる。
バカみたいな人生だと憐れむ者がいる。

称賛ばかりの存在などいる筈はなく。
強烈な光の影が暗く濃いのは当然のことだった。
そんな声が届いていなかったわけでもあるまいに、英雄は戦い続けた。
スネックは英雄に憧れていたし、憧れ通りでいて欲しかった。だから、真面目だとか、凄い実力の持ち主だとか、良い方向に受け取ろうとしてきた。
その憧れの影に隠れた妬みや嫉みを見ぬふりして。
だが違う。
本当に何も見えてはいなかった。
英雄はヒーローとして動いていただけだった。
ヒーロー協会所属のヒーローとしてではない。職業のヒーローとしてではない。
彼は真のヒーローとはなんたるかを知っていたから、理解していたから、戦い続けていたのだ。
民を守り、敵を倒す。そんな子供でも知っているヒーロー像ではない。
ヒーローたちからの救援という名のバトンを受け取ること。
モデルや広告塔などといった商品としての扱いを受けようと、次世代のヒーローへバトンを繋げるためにやっていること。
多くのスポンサーと懇意にしていることを訝しがられようと、今と未来のヒーローた

ちのために地位と信頼を積み重ねていること。
全てが民たちのためであり、ヒーローたちのためである。
全てが今のためであり、未来のためである。
その全てが届けるためであり、受け取るためである。
スネックは再度、心の内で呟く。
（当然だった。俺がここ止まりなのは。だがそれも）
――――今はまだ、な
殴り飛ばされビルへ衝突するスネック。
意識を失ったその表情には、不敵な笑みが浮かべられていた。
ここが彼の、始まりだ。

◇

ジェノスと深海王は激しい肉弾戦を繰り広げていた。

パワー、スピード共に互角。攻めに重点を置いたジェノスが、ジェット噴射も交えながら緩急を付けて巧みに戦っているため、ほんの少しジェノス優勢といったところか。

とは言っても、その優勢もあってないようなものだった。

深海王には高速再生があるからだ。

少しのダメージでは瞬きの間に回復してしまう。

故に、攻防においてはジェノスが若干の優勢を見せてはいるが、総じて戦況は深海王優勢で進んでいた。

防御の姿勢を取ることもなく殴り合う二人。

これだけ高速の拳打脚撃を応酬していれば、一瞬防御を取ってしまっただけで後は一方的にやられてしまう。

二人のスピードが互角となれば、それも必然のものとなろう。

（このままではいずれ負ける。……ならばッ！）

ジェノスは戦況を読み、流れを己へ傾けるために変化球を繰り出す。

深海王の片腕が打ち出される。次手にて片足が薙ぎ払い。もう片方の腕も打ち出される。

その打ち出される瞬間を見計らい、ジェノスが仕掛けた。

握り構えた拳を瞬時に後方へ。

片腕だけのジェット噴射による高速移動だ。
その加速による強力な膝蹴りを、深海王の顎へ。
その威力を感じ取った深海王は、反射的に攻撃を中断。首を体ごと傾け避けきった。
ジェノスは勢いそのままに深海王から離れて背後に着地。
ジェット噴射を行った掌とは逆の掌が、熱をエネルギーを収束していた。
「お前に時間は掛けられない――焼却」
掌から、熱が吐き出された。
だがその攻撃は二度目だ。深海王はその破壊力を知っている。
回避に全力を注いで深海王は地を蹴った。
後先考えぬ全力の踏み込みは深海王をビルへと激突させた。深海王はビルの中だ。
そして深海王が立っていた場所を焼却砲が通り過ぎ、図らずもジェノスに深海王の居場所を見失わせる。
焼却砲が遮蔽となってしまったのだ。
しかし。
(ビル内部から生体反応)
「そこか」
今度は両腕を構えた。焼却砲の連射だ。

近接戦闘では勝機が薄いと判断したのだろう。そうでなくとも時間が掛かるだろう、と。

ジェノスは遠距離戦に切り替えていた。

連続する焼却砲の発射音と着弾音。

ビルは瞬く間に崩壊していく。

ピピッ、と機械的な音が鳴る。またもやジェノスの生体反応が仕事をしたのだ。

（反応が上へ登っていく……？）

崩壊するビルから別のビルへ内部を破壊して移動したらしい深海王の反応が、瞬く間に上へ移動。数瞬でビルの屋上へとコンクリートを貫き姿を現した。

その間も絶え間無く焼却砲を打ち続けるジェノス。

（何故やつは屋上へ？　このままでは自身が不利だと認識している筈だ）

深海王の行動を訝りながらも焼却砲を連射し、屋上すらも崩壊させていく。

深海王は跳び跳ねるように屋上を移動し続け、追うように焼却砲が浴びせられる。

その姿は破壊の煙で包まれていくものの、ジェノスに関係ない。

クセーノ博士が組み込んだ生体反応は優秀だ。屋上にいるのも現状は深海王のみ。

戸惑うことなく連射を続行。

不安なのは避難所から逃げていない住民がいることだが、そちらへ気を回す余裕はな

い。

出来ることは深海王をなるだけ早く焼却することだ。

そして焼却砲を打ち込み続け、周囲のビル群に屋上がなくなった頃。煙を突っ切り深海王が高く跳躍し空中へと躍り出た。

格好の的だ。

エネルギー充填の時間ありのサービス付き。

「――――終わりだ」

一際太い焼却砲が滞空中の深海王へ撃ち込まれる。

命中。

――するかに思われた。

深海王は腕を振りかぶり、風圧がジェノスまで届くほどのパワーで殴り抜いた。打ち上げるような一撃。

焼却砲は深海王の腕とぶつかった瞬間に爆発。

深海王は殴った反動で地上へ向けて加速し着地。

焼却砲の爆心地から簡単に移動してのけた。

だがダメージは負っているだろう、と予測したジェノス。その思惑は裏切られる。

「ちょっと火傷しちゃったじゃない」

殴り抜いた拳に火傷を負っている程度。
その火傷も雨によりジュウジュウと音を立て、急速に冷やされていく。
それと共に、深海王の高速再生により瞬く間に火傷は癒えてしまった。
「まあ、もう治ったけどね」
その姿は初めてジェノスが深海王を見たときと同じ姿であった。人よりも魚類に近付いた捕食者の姿だ。その巨体も更に見上げるものとなっている。
（避難所で出会い頭に撃ち込んだ焼却砲は深海王に確かなダメージを与えていたというのに、何故だ）
その答えをジェノスは瞬時に導き出す。
とは言っても簡単で単純な答えだ。
あのときは深海王の内部へ直接焼却砲を撃ち込んだ。だが今回は外部からの攻撃。
（焼却砲では貫けない強固な外皮、か）
不味い。純粋にそう考えた。
怪人は変身の度に強力な個体へと成長していく。ならば目の前の深海王は？
こちらの答えも簡単で単純なもの。
「うふふ、元気出てきたわ。約束通りグチャグチャにしてあげる」
先までとは比べ物にならないスピード。そしてパワー。

気付けばジェノスは地を舐めていた。
「グ、ウッ……!?」
恐らくは視認できない程の速度で地面へ叩き付けられるように殴られた。
証拠にジェノスはその場で地面へと埋められたような状況だ。
気付けばクレーターの中心で伏臥位となっていたのだ。
ジジ……と音がする。
バチバチ……と音が弾ける。
電力が行き場を無くしていた。サイボーグとしての体の損傷は甚大だった。
殴られたのであろう肩から右側がごっそりと抉れているのだ。
右肩、右腕だけならまだ戦えただろう。だが深海王の巨大化した腕はジェノスの右肩から腰にかけても深く抉り取っていた。
右半身がほとんど無い状態だ。
幸い生身の脳と、胸部に格納されているエネルギーコアは無事だが……。
果たしてそれもいつまで無事だと言えるのか。
「あら?　思ったより脆いのねぇ、あなた」
思った以上にダメージを与えてしまった。しかも今気付いた。そんな声音だった。
「まあいいわ。次は左いっとこうかしら」

振り上げられる拳。狙われたのは左腕、ではなく。左脚だった。
立てなくなった。これで万が一の逃亡は不可能。
「忘れるとこだったわ」
すぐに左腕が潰された。
ジェット噴射での移動を思い出したらしい。
これで完全に移動は出来なくなった。匍匐前進すらも不可能。
芋虫のように這うことは可能だが、その行動にどれだけの意味があるというのか。
「じゃ、最後の一本よ」
残った右脚が潰された。
言葉通りにグチャグチャに、体を分解していく。
「あなた私に軽症を負わせたのは高く評価するわ。ま、元に戻った私に傷を付けるのはもう不可能でしょうけど」
そして再び拳を振り上げ。
「死ね」
終わった。
ジェノスは思った。
少し離れた避難所から、まだ逃げていない住民たちが覗いていたが、彼等の心境も同

じであった。
「ああ……ジェノスさんが…」
「おい、あっちも…」
「スネックたちがやられてる……」
「ちくしょう…全然ダメじゃねぇか……」
またもや心は闇に覆われていく。
だが繰り返されるのはそれだけではない。
新たなヒーローもまた、現着した。
「ジャスティスクラッシュ！」
自転車だ。
自転車が深海王にぶつけられた。だが痒みすらも与えられない。
それを行った男は一人。
「正義の自転車乗り――無免ライダー参上!!!」
（C級ランキングトップの……）
「よ、よせ！」
ジェノスは瞬時に男の正体を把握。そして制止の言葉を放った。
明らかに無謀な行為。

自殺と何ら変わりない。
「む、無免ライダーだ！」
「無免ライダーが来てくれたんだ……」
「でも……」
「……」
徐々に尻窄みとなっていく住民たちの言葉。それはこの状況がどれだけ絶望的なものか、そして無免ライダーがどれだけ無力なのか、理解しているが故。
誰の目から見ても、C級の無免ライダーに勝ち目はなかった。
「とうッ！」
走り出す無免ライダー。
彼はこの状況を理解している。
だが、それでも走り出す。
「もう飽きたのよ」
「おりゃ！」
繰り出される無免ライダーの拳撃は容易に受け止められ、その拳は虫カゴに自ら入る虫と化す。
拳は深海王の拳で更に握り込められ、振り回される。

虫の入った虫カゴが振り回されれば中の虫は瀕死となろう。
そんな一方的で、拭えぬ格の差がそこにはあった。
地面に二度叩き付けられ、血を吐き出す。そのまま無造作に放り投げられ、また地面に激突する。
「あーごめんね、トドメ刺すの遅れちゃって」
最初から無免ライダーに興味などなく、動けなくなればそれで良かった。
だが無免ライダーは立ち上がる。
「ジャ……ジャスティス、タックル」
たった三度の、深海王からすれば攻撃とも呼べない攻撃で息も絶え絶えな無免ライダー。
その行動は深海王を酷く苛つかせるものだった。
「あううううう……」
「はあ?」
「うう……期待されてないのは分かってるんだ…」
四度目は腕を振っただけ。蚊を払うように。力など込めずに。
「っぷー」
それだけで吹き飛ばされ、地面を滑る。

既に満身創痍だ。
あと一度でも攻撃を受ければそれだけで意識が飛ぶほどに。
「C級ヒーローが大して役に立たないなんてこと、俺が一番よくわかってるんだ！」
天から打ち付けるように降る雨。
彼はそれに抗うように、立ち上がる。
「俺じゃB級で通用しない。自分が弱いってことは、ちゃんとわかってるんだ！」
「な～にボソボソほざいてるの。命乞い？」
「俺がお前に勝てないなんてことは、俺が一番よくわかってるんだよぉッ……！」
彼は、弱かった。
けれど、強かった。
ジェノスすら制止の声を忘れて、耳を傾けるほどに。
「それでもやるしかないんだ。俺しかいないんだ」
彼の魂の叫びは皆を惹き付ける。
その言葉に、皆が釘付けとなる。
「勝てる勝てないじゃなく、俺はここで、お前に立ち向かわなくちゃいけないんだ！」
その言葉に何も感じないのならば、その者は人の心を持たないか、それとも知らないのか。

「訳わかんないこと言ってないで、早くくたばりなさい」
それは深海王であった。
だが確かに、その言葉が届いた者たちは存在する。しかと彼を両の瞳で見て、認識している。
心を揺さぶる言葉は、聴く者の心も揺さぶった。
誰の目から見てもC級ヒーローである無免ライダーに勝ち目など無かったが、しかし彼等は。
「がんばれえええええ！」
「無免ライダーがんばれえええ！」
「ガンバレ！」
「がんばれえええ！」
住民たちは、確かに揺さぶられた心のまま、叫んだ。
「そいつをやっつけてくれぇぇ！」
「あんたが頼りなんだよおおお！」
「勝ってくれーッ！」
「無免ライダーー！」
「がんばってくれぇぇぇ！」

人々は最後の希望を、彼に託していた。
「無免ライダー勝てええ！」
「がんばれええ！」
「がんばれ！」
「ファンだ！　死なないでくれええ！」
人々の声援はヒーローの血肉となり。
無免ライダーはまるで傷などないかのように雄々しく吼え猛る。
「ぬぅおおおおおあああああ!!!」
拳を握り締め、人々の声を力にし、いざ戦いのとき。
「がんばれええ！」
「無免ライ……」
だが、それでも力の差は如何ともし難く。
ただ一撃、頬に受けた深海王の拳で沈められてしまった。
「無駄でしたぁ」
にやけた表情で、その場の全てを嘲り、嗤っていた。
深海王に倒された無免ライダーを見て、言葉を無くす人々。
雨がアスファルトを叩く音だけが、周囲を包み込んでいた。

だからかもしれない。
カツリ、と鳴った靴音が雨音の中を走り抜けたのは。
次いで、声が聞こえたのも。
「――――無駄じゃないさ」
それは、深海王の言葉を否定する言葉だった。
場違いなほどに酷く涼しげで、けれど言葉の中には隠しきれぬ温かみがあった。
「ま～たまたゴミが……」
しゃしゃり出てきた、と言葉は続かない。
その男の姿を深海王は知っていたから。
天空王も、地底王も彼を警戒している。故に深海王も彼を警戒していた。あの天空王たちが警戒するほどの相手だから。
初めて彼を知ったのは、たった一人の人間を天空王が警戒していると聞き及んだとき。
ついで、海に流れてくるゴミの中から、彼に関する品も多くあったことが幸いし、それらでセフィロスという男の容姿や噂を知った。
なるほど。これが事実ならば、空から地上を見下ろしている天空王が実際に彼を目撃し、それから警戒をしている可能性は考えられる。

噂によれば今まで負け無しの、人間の中で最も強い戦士らしいのだから。
はっきり言って人間を警戒するなどバカらしい。だが、この男は一応警戒しておくか。なに、実際に戦えば自身が負けることもあるまい。
深海王にとってはその程度の認識だった。
だが、なんだこれは？
なぜ強いのか弱いのかすら分からないんだ？
それが深海王にとって大きな疑問だった。
どこか今までの人間たちとは全く違う気がするのは、深海王のただの直感ではあったが、それが間違っているとも思えなかった。
「なぜ……あなたがここにいるのかしら？」
深海王は今までに感じたことのない戸惑いから、攻撃よりも対話を選ぶ。
そしてそのこと自体に、深海王は気付いていなかった。
「お前を倒すためだ。……ヒーローだからな」
自信に満ちた言葉ではなかった。
覇気に溢れた言葉でもなかった。
なんでもない日常会話の延長のような、そんな声音であった。
だがその泰然自若としたセフィロスの様相に、住民たちはハッと止まっていた時間を

取り戻す。
セフィロスが来た。それを認識したから。
そして、安心した。
セフィロスのみがこの絶望的な戦場で、日常を過ごしていることを異常には思えなかった。
この場でセフィロスのみが日常の中にいるなど、本来ならば異常に映る筈なのに。住民たちは誰もそうは思わなかった。
住民たちの心を代弁するならば……。そう、まるで帰り方の分からなくなった日常へと連れ出すために、帰り道へ導いてくれているような……。
そんな、迷子から抜け出せる確信、にも似た安心感を住民たちは抱いた。
セフィロスが来たこと。そして、セフィロスが目に見えぬ手を差し出して住民たちを導びこうとしていること。この二つだけで、住民たちが意識を取り戻し、安心するなど簡単なことだったのだ。
「あ…ああ……セフィロスが、来てくれた…」
「勝てる、よな?」
「彼が負けるわけないでしょ!」
「でも同じS級でも勝てなかったんだぞ…」

安心感を抱き、冷静になった住民たち。
絶望は拭えた。だが今度は一抹の不安が生まれる。
先ほどまで次々と地に平伏すヒーローたちを目の辺りにしてきたのだ。仕方のないことである。
そんな中、セフィロスがスルリと何かを指差した。
深海王の背後だ。
深海王の背後の方向。少し離れた位置には海人族が多数いる。
そこでふと、深海王は気付いた。
セフィロスの指差した方向に存在する気配が、恐ろしい速度で減少している。
風を切るように深海王は振り向いた。
「一体なにが……!?」
その深海王の眼前へ、何かの肉片が吹き飛んできた。
海人族だ。
それも、海人族最後の一体のようであった。
感じる気配はゼロになっていた。
そちらから歩いてくる一人の男。
まるで強そうに感じない。見ただけならば弱そうにしか感じない。

「おっ、こいつで最後か」
なんでもないように、深海王を見てそう言った。
誰も彼が戦っているところを見ていなかったが、飛んできた方向と肉片を見て、更にその言葉を認識すれば、誰が海人族を倒したのか瞭然とするだろう。
「なんだあいつ……ヒーロー？」
「……あ、C級の新人だよ。名簿で見た気がする」
「セフィロスが来たのに今さらC級が来ても……」
「でもあっちの怪人全部やっつけたの彼なんじゃ……？」
戸惑うこと人々。
なんだかセフィロスが来てから戦場の冷たい空気が吹き飛んだようだ。
「あなた……私の手下たちを倒したの？」
「……ん？　おいジェノス！　おまっ、それ大丈夫なのか!?　こっちにも倒れてるやつ、あっちにもいたし、けっこうヤバかったのか？」
「……先……生…」
会話が成立していない。
彼はC級ヒーローサイタマ。故に仕方がなかった。
彼は興味のないことにはとことん意識を向けないから。

「あれ？　セフィロスもいんのか。もしかして怪人倒すとこだった？」
何処までも日常的な声音と雰囲気。
またしても現れた同じような存在は無名。
故に住民たちが今度感じたのは戸惑いだった。
だが。
――いつの間にか、不安すらも消し飛んでいた。
「いや、折角だ。今回はお前の力を見せてくれ」
セフィロスは静観の構え。
「え？　セフィロス戦わないの？」
「なんで……？」
「あのC級が戦うって……」
「いや無理だろ」
口々に住民たちがざわめき出す。
サイタマはそちらにも意識を向けず。
「そうか」
納得して一言返し、深海王の前にサイタマが立った。
「んじゃそういうことだ。海珍族とやら」

「海人族よ！」
流石にほのぼのとした雰囲気に騙されなかった深海王は、名前を間違えた人間を潰すため頭部を殴打。
だがサイタマは倒れない。
「あら？　あなた、私の殴打で倒れないなんてやるわね……。セフィロスほどではないにせよ、今までのゴミとは明らかに違うわ」
「なぁに……テメーのパンチが貧弱すぎるだけだろ」
その光景にざわめきは一層増す。
殴られたように見えた。いやそれは見間違いだ。
そんな住民たちの声。
彼等はただの一般人。深海王の攻撃を視認するのは不可能だった。
深海王はセフィロスほどの強さではないにせよ、多少強いからと傲岸不遜な態度の人間へ、相手をしてやることに決めた。
「私は深海王、海の王……。海は万物の源であり母親のようなもの。つまり海の支配者である私は世界中、全生態系ピラミッドの頂点に立つ存在であるということ。その私に盾ついたという」
「うんうんわかったわかった。雨降ってるから早くかかってこい」

深海王の折角の口上も、耳をほじるサイタマに遮られてしまう。
そこが沸点だった。
常人には知覚不可能な速度で殴りかかった深海王。
その深海王を後だしのパンチ一撃で仕留めるサイタマ。
――一瞬の決着だった
この場でそれを正確に把握できたのはセフィロスのみ。
住民たちは深海王が腹に大穴を開けて倒れ伏すのを見て、事態の終息を悟った。
なんと呆気ない終幕か。
だがそれを視認し理解した人々からは、自然と歓声が溢れだした。
喜びと安堵が涙となって流れ出した。
だが、どんな時代でも安全な場所から無粋を働く輩は存在するもの。
「実はあんまり強い怪人じゃなかったんじゃね？」
たった一言が、またもや空気を変えた。
近くの者が暗に否定する。
「いや、でも色んなヒーローが負けてるぞ……」
「負けたヒーローが弱かったんじゃね？」
「それは……」

次の言葉に否と言えなかった。
敵は強く見え、味方は弱く見えたから。戦いの経過ではなく、勝敗に引き摺られているから。
けれど人々に個体の強弱を見抜くなど不可能なのだから、この話はどこまでいっても無意味なものだろう。
そしてもう一つ。
「確かに今の見ると敵が弱く見えたけど」
無名のヒーローが、数々のヒーローを退けた怪人を一撃で倒した。
その事実が住民たちを余計に混乱させる。
敵が強く、ヒーローが弱かったのか。それともその逆か。もしくはまた別の結論となるのか。
住民たちにはどれが事実なのか判断できない。
「そこにいるC級ヒーローが一撃で倒しちゃったんだぜ（笑）　負けたヒーローってどんだけ……。A級とかS級とか、肩書きだけでぶっちゃけ大したことないんだな」
「おいやめろよ。一応命張ってくれたんだぜ」
制止の声がかかるも、男は言葉を止めない。
得意気に無粋を吐き出し続ける。

ニヤニヤとした笑いはヒーローたちを嘲っているのか、侮っているのか。
もしやヒーローを弱いと決めつけて馬鹿にすることで、自身が彼等より上等な存在だと錯覚する愚人であったか。
「命張るだけなら誰でもできるじゃん。やっぱ怪人倒してくれないとヒーローとは呼べないっしょ。今回たくさんヒーローに重傷者が出たらしいじゃん？　そんな人たちを今後も頼りにできるかっつーと疑問だよね」
それに、と男は続けた。
ちらりとセフィロスを見た。
「S級1位で英雄とか呼ばれてるけど何もしてない人もいるし。なんで来たのか分かんないよね。戦いもC級の人に任せるし、本当は弱いんじゃね？　っていうか来るの遅すぎ（笑）」
住民たちの視線がセフィロスへ向く。
それにより、セフィロスは静観の姿勢をやっと崩した。
歩き出したのだ。
サイタマは、何も言わずに雨の中で佇んでいる。
セフィロスがどう動くのか、それを見ているように思える。
「ヒーローのトップのくせに肝心なときに休暇取るし、来ても活躍してないし。

ニュースとか特集とか噂とか、当てにならないよね。他のヒーローだって結局ヒーローらしい活躍してないしさ。時間稼ぎなんて工夫すれば誰だってできるじゃん」

セフィロスは歩みを進めて避難所と、そこから少し離れた場所にいるサイタマたちの元へと進む。

チャキリ、と音がした。

声と雨音の中で、一つだけ鳴る金属音。

それはまたもセフィロスへ視線を集める。

そして住民たちは息を飲む。

セフィロスの手が刀の柄を握っていたから。

「……知らねーぞ。お前が怒らせたんだからな」

「温厚なセフィロスが怒るとか、死んだな」

誰もが怒りを堪えているのだと思った。

当たり前だ。この状況で刀の柄を掴んだのだから。

「…す、すぐ実力行使？　ほんとにヒーロー？　敵と戦わないで人を攻撃するとか有り得ないよね……！」

先まで饒舌だった男が冷や汗を流して後退りした。

それを一瞥すらせず、セフィロスは刀身を見せ付けるように、ゆっくりと刀を引き抜

いた。
その長刀は改めて見ても異様な存在感だ。
誰かがゴクリと喉を鳴らした。
セフィロスはサイタマを通り過ぎた辺りで立ち止まり、刀を構えた。
力を溜め放ったのは、大振りの一太刀。
その刀身が振るわれた先は――空。
薙ぎ払う一太刀は極大の剣圧を発生させ、雨雲を両断。そのまま散り散りに霧散していく。
遅れて人々を襲う、体ごと吹き飛ばされそうになる突風。
反射的に顔を隠し姿勢を低くした人々は、ゆっくりと目を開けると変化に気付いた。
「雨……止んでる……」
「……うそ」
空を見上げれば、天が二つに割れていた。そのまま細かく千切れていく雲たちを認識し、誰がそれを行ったのか理解する。
まるで信じられない。そう言わんばかりに、言葉もなく空とセフィロスを見比べる人々へ、セフィロスが言った。
「もう敵はいない。雨もやんだ。ならばやることは一つだ」

長刀を腰に納め、振り返り様に少し笑んだ。
馬鹿をする可愛い我が子へ優しく促すように。
「――――さあ、帰るぞ」
そして気を失っている無免ライダーを担ぎ上げ、ポツリと囁くように呟いた。
その視線はここにいるヒーローにも、いないヒーローにも向けられているような。
「お前たちもよく頑張ったな。よく、ここまで繋いでくれた」
小声は風に乗って人々の耳に入る。
優しく、温かく、誇るような声音であった。
そこに含まれている意味を、言葉にしなくとも容易く受けとることができた。
『誰が何と言おうと、お前たちは凄いやつだ。命を賭けて戦い抜いたお前たちこそが、ヒーローだ』
何故か人々にはそう聞こえた。
セフィロスの放った声音がそう思わせる程に深く、彼等を肯定していたからかもしれない。
先まで無粋を吐き出していた男は戦ったヒーローたちをこう言った。
『ヒーローらしい活躍をしていない』
『時間稼ぎなんて工夫すれば誰にだってできる』

それは事実だろう。
誰もがその言葉に、心の内で大小あれど頷くほどに。
だが、だからこそ否と言える。
ヒーローらしい活躍など臨めなくとも、彼等は戦うことを選んだ。
誰でもできる時間稼ぎを人々は行動に移さなかったが、彼等はやり遂げて魅せた。
――命を懸けて。
そんな彼等がヒーローでなく、なんだというのか。
彼等こそが、ヒーローだ。
それもまた事実で、現実だ。
セフィロスはそう言っている。
人々はそう捉えた。
「そうだよな……皆おれ達のために戦ってくれたんだよな」
「私たちは見てるだけだったけど、それだけでもこわかったんだから。実際に戦ったヒーローたちは凄いわよね」
「ありがとう！」
「戦ってくれてありがとう！」
晴天の下、濡れた世界がキラキラと光る。

そこへ溢れる人々の言葉を背に、無免ライダーを背負ったセフィロスは去っていった。

その後を追うように、ジェノスを背負ってサイタマも去っていく。

二人は並んで、人の気配がない街で帰路についた。

数日前と似たような光景だ。

「いやー、さっきは人斬っちゃうのかと思って焦ったけどさ、なんか映画のエンディングみたいになったな」

「たまたまだ」

「っていうか皆セフィロスのこと知ってるみたいだったけど、お前有名なのか？」

そういえばと、ジェノスが補足する。

「先…生……」

「おいジェノス、あんま無理すんなよ」

「セフィ…ロスは、S級……1位の、ヒーロー、です……」

「……えっ？」

そんなリアクションのサイタマを見て、セフィロスが笑みを浮かべた。

「どうした。間抜けた顔だぞ」

「いや……まじで？」

「ああ、まじだ」
「……そっか」
セフィロスの笑みに返すように、サイタマも笑んだ。
サイタマの胸の内にストンと落ちた納得が、そうさせたようだ。
「あっ、そういや今日はごめんな。約束守れなくて」
「いいさ。約束は守れなくても、埋め合わせることができる。だが命の埋め合わせなどないからな」
怪人被害でもし人命が失われていれば、その命は戻ることなどない。代わりもいない。
果たせなかった約束の埋め合わせはできても、命の埋め合わせなど人には不可能だ。
サイタマ。お前はヒーローとして間違っていない。
セフィロスの言葉にはそんな意味が籠っていると、サイタマには容易に受け取れた。
「でも、今日はお前休み取ってくれてたんだろ？　ヒーローに休みってのも何か変な話だけどさ」
そう言うサイタマをちらと一瞥して、セフィロスは言った。
「なら、そうだな。今日は俺に付き合ってくれ。お前たちが暇なら、だが」
「おう、暇だしいいぜ」

無駄にキリリと引き締めた表情で答えるサイタマ。怪人退治のときより真面目で格好よく見えるほどだ。
しかしセフィロスはさらりとそれを流す。
「そうか。それならば行くとしよう」
「行くって何処に？」
「たこ焼き屋」
（あのセフィロスがたこ焼きだと……。……たこ焼き。……なぜ、たこ焼きなんだ）
ひっそり驚くジェノス。
ハッとして二人に言った。
「なら…ば……俺、は置いて…行ってく…ださい…」
「え、でもそんな状態だとヤバくないか？」
「クセーノ博士に、回…収を、要請するので……問題ありま…せん」
「クセーノ博士って確か……誰だっけ」
安定のサイタマ。興味がなければとことん物事を覚えない男だった。
聞いておいて、それでも興味なさそうなのは流石にちょっと……。
だがセフィロスの方は興味深そうにジェノスを見ていた。

「ジェノス。お前はクセーノ博士と親しいのか？」
「……？　俺の、恩人……だ。サイボーグ化……もクセーノ博士…に行って、頂いた……からな」
「そうか」
二人を見てセフィロスが言った。
「悪いな二人とも。予定変更だ」
「え、たこ焼き屋いかねーの？」
「ああ。ついでと言ってはなんだが、俺も久々に挨拶をしておこうと思ってな」
「そのクセーノ博士ってやつにか？」
「そうだ」
二人の会話を尻目に、ジェノスはまたしても驚く。
（セフィロスとクセーノ博士に繋がりが……？　いや、まさか……）
ふと思い返すのは、未だクセーノ博士の拠点にて世話になっていた頃のこと。
時折クセーノ博士へ差出人不明の手紙が届いていた。
それを見てはクセーノ博士が様々な表情をしていることを、ジェノスは知っていた。
（あれはセフィロスからの……？　だとすればどのような繋がりが？　……いや、まだそうと決まったわけではない）

すぐに分かることだ。
そう結論付けて、一行は行き先を定めた。
「――さあ、行こうか。クセーノ博士の元へ」
颯爽と方向転換をするセフィロス。
その後を追うサイタマが困惑顔をした。
「結局クセーノ博士って誰だよ……」

災害レベル【?】

その日、J市を恐怖で覆った深海王、並びに海人族たちは撃破された。
その災害レベルは鬼であったが、鬼の中でも上位の脅威度であった。それが協会職員の最終的な見解だ。
S級ヒーローが二名も敗北したことで、脅威の度合いがそこまで高く見積もられたのだ。
その上、その脅威を打ち破ったのはC級ヒーローだ。
何も知らない者たちが騒ぎ出し、協会へのバッシングが強まるのは至極当然のことだった。
例え二人のS級ヒーローが不意討ちにより大きなダメージを受け、常の実力を発揮しきれなかったとしても、それで納得してもらえる世界ではない。
世間の荒波は優しくはなく、ヒーロー協会をその波濤で責めるのみ。
そしてこの度、戦いに敗れたヒーロー達もまた己を責め、心の戦をしていた。

それはヒーローたちが自身で乗り越えなければならない問題。しかし乗り越えた暁には、彼等は今よりも更なる飛躍を見せるだろう。

その時がいつになるのかは、さて。

ここで一つ。

突然だが御復習(おさらい)をしておこう。

災害レベルとヒーローのランクについてだ。

まず災害レベル。

災害レベル【狼】。

危険因子となる生物や集団の出現。

災害レベル【虎】。

不特定多数の生命の危機。

災害レベル【鬼】。

町全体の機能が停止もしくは壊滅の危機。

災害レベル【竜】。

いくつもの町が壊滅する危機。

災害レベル【神】。

人類滅亡の危機。
以上の五段階となる。
次にヒーローのランクについて。
C級ヒーロー。
一般人より少し強い程度。三人集まれば災害レベル【狼】に対処可能。
B級ヒーロー。
災害レベル【狼】を一人で対処可能。五人集まれば災害レベル【虎】にも対処可能。
A級ヒーロー。
災害レベル【虎】を一人で対処可能。十人集まれば災害レベル【鬼】にも対処可能。
S級ヒーロー。
災害レベル【鬼】～【竜】に一人で対処可能。人類の最高戦力。戦闘力の高い者を選抜して組織されている。
ただし、これらはあくまでも基準のようなもの。
基準より下の者も、上の者も当然いる。
そのため過信は禁物だ。
そして言える確かなことがある。
怪人はどれも人間より強靭であり、凶悪だ。常人では立ち向かうこと自体が愚かな行

為だ。災害レベル【狼】にすら常人は敵わない。
そして彼等に立ち向かえるヒーローは確かに何処かで常人を超えた存在であり、超人である。例えC級のヒーローであろうと、だ。
さて話を戻そう。
災害レベル【鬼】に対処可能なS級ヒーローが二名も敗北してしまった此度の深海王。
その深海王を倒してしまった名も無きC級ヒーロー。
この二つの事柄に、協会は緊急の会議を開いた。
S級ヒーロー二名の敗北。
これだけでも衝撃的に過ぎる事件だ。
A級やS級は社会的影響も強いため、ヒーロー協会としては敗北の二文字が痛すぎるのだ。
端的に言って、協会の存在意義すら疑われるレベル。
民衆やスポンサーからの信用を多少なり失うことは避けられぬだろう。
更に言えば、セフィロスが一日いなかっただけでコレだ。
ヒーロー協会とヒーローに対する世論は良くない方向へと傾いてしまった。
救いなのは、事件被害者であるJ市民たちから攻撃的な言葉や行動がなかったことか。

ヒーローや協会へ、感謝の声が多く届けられていた。
だがそれも気休めにしかならない。
具体的な解決策が必要だ。
「この件に関しましては、ヒーローの人材不足解消と個人の戦闘力の底上げが必須課題となるでしょう」
「そんなものは後でいい。スポンサーへの言い訳は用意できているのかね。彼等と手を切ることになれば協会自体が存続できんのだぞ」
「確かにそうかもしれんが、そこは口の巧いやつに任せればどうとでもなるだろう。それよりもっと高度な情報伝達システムを構築すべきでは？」
「全て急ぐようなことでもあるまい。セフィロスがいればそれで問題ないと思うのだがね。」
思ったことを口々に言う協会役員たち。
そのまま会議は進行していく。
端的に言って、会議をしている光景ではなかった。まるで意志疎通が出来ていない。
彼等の言うことも一考すべき事柄ではあるのだが、残念ながら仔細に話し合うつもりはないらしい。
実行するにしても計画への肉付けや実行は、この場にいない彼等の部下たちが行うこ

とになるのだろう。

「そういえば、怪人にトドメを刺したというC級ヒーローについてはどうするおつもりで？」

おっと忘れていた。そんな言葉が聞こえてきそうな切り出し方をした協会役員がいた。

その言葉により、話題はとある一人のヒーローへと移行する。

「災害レベル【鬼】を倒したんだ。これまで通り、S級への昇格でいいんじゃないか？」

S級ヒーロー。

言葉正しく、超人のみが在籍を許される位階。

成り立ちはセフィロスが起因であり、初期メンバーはそのセフィロスが声をかけることで集まった。

それ以降のメンバーは協会が市井から見つけてヘッドハンティングに成功した者。下位のヒーローの中から【鬼】を単独撃破した者が現れた場合には、その者をS級へ昇格させることで人員の拡充を図ってきた。

今回もその例に当て嵌めての判断だろう。

しかし。

「そうすればいいと私も思いますが、このサイタマというC級ヒーローには問題がご

ざいまして」
「問題?　今のS級ヒーローたちを超える問題児だとでも言うのかね」
「ははは、今さら問題児が一人や二人増えてもな」
隣合う職員同士で笑う声も聴こえる中、その問題が提示された。
言葉は酷く神妙な声と顔で告げられた
「どうもこのサイタマというヒーローは、ヒーローテストでインチキをしたとの噂がありまして。そのインチキのせいなのか、記録は全て過去最高記録。それも次点に大きく差を着けた圧倒的なものなのです」
「私も聞いたな。なんでも審査員の買収や機器への細工等をしていたとか」
「ふーむ。それが事実かどうか今のところは判然としていないのだよな、確か」
「ならば取り敢えず昇格は保留ということでいいのでは?　なにより私も彼を映像越しに見ましたが、S級に上げるのは不可能に思えますし」
「ああ、アマイマスクの審査に一度通す必要があるからな。噂と相まってA級以上への昇格は絶望的だろう」
A級以上のヒーローは社会的な影響も大きくなる。彼等が下手なスキャンダルでも起こそうものなら、それだけで協会へのバッシングへと繋がるだろう。
それを危惧したA級1位ヒーロー【イケメン仮面アマイマスク】と協会役員たち。彼

等は民間の支持を得るため、一つの取り決めをした。
それは『A級以上のヒーローたちの管理』。これを部分的にアマイマスクにも担ってもらうというもの。役員会で正式にきめられたことでもある。
きっかけはアマイマスクが『そちらの方面』に口を出させろと言い募ったことにあるのだが、それは蛇足であろうか。
俳優やアイドル、モデルなど多方面で活躍するイケメン仮面アマイマスク。
彼の社会的影響はとてつもなく大きい。ヒーローとして圧倒的存在感を放つセフィロスよりも、影響は大きいといえる。
そんなアマイマスクは同じ協会所属として、他のヒーローたちの不祥事やS級の身勝手さを嫌う。ヒーローとしての才や能力のない者には更なる嫌悪を向ける。
必然、アマイマスクに『そう』判断された者達はいくら実力があろうと実績を積み重ねようと、A級以上へは昇格ができない。
現在のサイタマは実質、昇格することは不可能。
しかし、何事にも例外はある。
アマイマスクの隠された一面。力の信奉者としての側面を持つ彼。そんな彼を刺激するほどに格の違う力を知らしめることができれば、あるいは――――。
「ま、今回は彼をC級1位へ繰り上げるだけでいいでしょう」

さて、今回の結論は出たようだ。
それに伴い役員会議も終了を迎える。
さて、サイタマがＡ級以上へ上がる日は来るのだろうか。
もし来たのならば、それはサイタマの真の力が周囲へと伝わり始めるプロローグとなるのだろう。

◇

周囲に人影はない。
入りくんだ裏路地で、一層人が寄り付かなさそうな地点。人目などあろう筈もない箇所。
古びた建物の扉を開けて入る三人の人影があった。

「現在はここを拠点にしているのか」
「ああ……ここ、で間違いな、い」
セフィロスの言葉にジェノスが答えた。
入って歩を止め、中を見回した。
セフィロスは何かを思い出すように視線を巡らせ、壁の本棚を見付けるとそこへ近付いた。
指先を少しだけさ迷わせ、取り出した本の題名は『ＬＯＶＥＬＥＳＳ』。後ろには第１章と続いていた。
「それ、どうすんだ？　もしかして本棚が動く仕掛けでもあんの？」
「まあ見ていろ」
素っ気ない言葉だけ返し、セフィロスは本を片手に二階へ上がった。
そのまま右側の通路へ進み、その先にある部屋へ入る。
その部屋の壁には下り階段が。
「この先だ」
「……隠してねーのか。じゃあその本を取った理由は？」
「特にない」
「えぇ……」

悪戯好きの少年がするような笑みを垣間見せ、セフィロスは階段を降りていく。
サイタマはジェノスを背負い直し、困惑顔をしながらも後を追った。
……サイタマが一人「これが英雄ジョークか」と謎の納得を抱き、セフィロスへ謎の信頼度を上昇させていたのは余談です。
そうして三人は階段を下りきり、そこから真っ直ぐに伸びた通路を進んでいけば、見えたのは一つの鉄扉。
特に逡巡もなく扉を開けて中へ入るセフィロスに続けば、サイタマの目に広がるのは地下に広がる機械の園。
クセーノ博士がジェノスをサイボーグ化した話から分かる通り、これぞ科学者の研究施設と謂わんばかりの光景であった。
これほど想像通りの光景も珍しい。
「――――久しぶりじゃの、セフィロス」
機械の園から声が一つ。年季感じさせる老人特有の声だった。
声の発信元は機械の影から姿を現し、三人の眼前に立つ。
マッシュルームを思わせる髪型、感情を表出させない瞳、常に着ているのだろう縒れた研究用白衣。
「クセーノ博士……お久しぶりです」

セフィロスが珍しく敬語で親しみを込めて呼んだその人こそ、この研究施設の主。クセーノ博士その人だ。

「たまに手紙を寄越すだけだったお主が、どういった風の吹き回しじゃ？」

「なに、どうやら奇縁に導かれたようでして」

チラリとジェノスを見るセフィロス。

それを見てクセーノ博士は花咲くように笑った。

「なるほどのぅ。お主にとっての奇縁がワシにとっての良縁じゃったか」

嬉しそうな顔のクセーノ博士は話を続けようか悩んだ。久しぶりに見る顔だ。もっと色々と話したい。そう思うのは自然なことであった。

だがジェノスを見てみればそうもいかないと、己の中に優先順位をつけていく。

セフィロスとジェノス。二人共がクセーノ博士にしてみれば孫のようなもの。いつまでも痛々しい姿は見ていたくない。

「ジェノスは相当にやられたようじゃの。すぐに直すから安心しておくれ」

「申し訳…ありません。よろ、しくお願いし…ます」

一つ頷いたクセーノ博士はジェノスを担いでいるハゲ……禿頭の男性に目を向けた。サイタマのことだ。

「君はもしやジェノスの師匠だというサイタマ君かな？」

「そうだけど」
「ワシはクセーノ。ジェノスがお世話になっておるの。今日は是非ゆっくりしていって下され」
「俺はサイタマ。よろしくな、クセーノ。折角だし今日は寛がさせてもらうか」
なんとも大胆不敵……というよりは感情の起伏の少なさ故か。サイタマは平常運転でクセーノに接していた。
それを聞いても咎める者はこの場にいなかったところから、クセーノ家族（暫定）はサイタマのらしい言動に納得しているらしい。
「ではワシは早速ジェノスを直してくるから、帰って来て早々悪いんじゃがセフィロスはサイタマ君を案内してやってくれんかの」
「勿論です。さあ、サイタマ。着いてくるといい」
「おう、じゃあ世話になるぜ」
「クセーノ博士、よろしく…お願いし、ます。サイタマ先生、また後で…お会いしま…しょう」
クセーノ博士と機械に運ばれていくジェノス。
セフィロスを先頭に着いていくサイタマ。
それぞれが歩み出し、暫しのお別れとなった。

セフィロスは勝手知ったるといった歩みでサイタマを先導する。
事実その通りなのだろう。どこか懐かしさを滲ませたような表情。サイタマからは見えないが、セフィロスの瞳には穏やかな色が宿っていた。
つと、機械の園を抜け出して歩みが止まる。
一つの扉。ドアノブはない。
これも懐かしいな。セフィロスは内心呟いた。
日々の生活では触れることのない機械、操作、動作。それらを己の身体で感じると、より一層感じる思いが膨れ上がるようだ。
扉の横に四角形のパネルが置いてある。そこへ掌を翳せば、扉が自動で開かれる。
機械に登録した者が掌を翳すことで認証されるようだ。
ここでもセフィロスは少しの感動を覚えた。
どうやら未だに登録を抹消したりはしていないようだ、と。
そして自動で開く扉を抜ける。
そこは広い部屋だ。
簡易的な台所。冷蔵庫。テーブルと、それを挟むようにソファー。六人は座れるだろう。壁際には書棚が幾つかあり、本が隙間なく並べられている。書棚の横には両袖机。机上にはデスクトップパソコン。椅子はリクライニングチェアだ。また、部屋のコー

ナーには大型のテレビが設置してある。
どうやらリラックスルームとしても、客間としても、ちょっとした仕事用にも使えるようデザインされているらしい。
色は全て落ち着いた風味の暗色系統。シックな部屋に仕上がっている。
「ここで時間でも潰そうか」
セフィロスは部屋をキョロキョロと見回していたサイタマに振り返り、そう声を掛けた。
そんなに珍しい部屋だろうか？
「なんかクセーノらしくない部屋だな。いや、落ち着いてるし老人っぽくはあるのか？」
開口一番これである。
狭量な者が聞けば怒り出しそうだ。
セフィロスは可笑しそうにクツクツと笑った。
「ここは個人部屋というわけじゃないからな。自然とそうもなるさ。それと、このデザインにしたのは、俺だ」
「あ、そうなんだ。意外とセフィロスってオシャレなんだな。もしかしてそういうのに気い使ってんのか？」

「そういったつもりはないんだが……。因みに、俺は一回の洗髪でシャンプーを一本使っている」

「ブフォッ！」

ニヤリと口角を上げながら放ったセフィロスの言葉に吹き出したサイタマ。それを尻目にセフィロスは台所へ向かいコーヒーを入れ出した。

セフィロスがコーヒーをテーブルへと持ってきたときには、すでにサイタマがソファーへ腰かけていた。

なんというやつだ……赦せんッ！

などとなるわけもなく、セフィロスはコーヒーをサイタマの前へ置くと、自らもソファーへ腰を下ろした。

忘れているかもしれないが、彼らは二度目の邂逅である。なのにもう気安さを感じるのは、さて。

気付けばサイタマは自分の頭を触っていた。

「どうした、頭皮マッサージか？」

「ちげーよ！　……なあセフィロス、強くなるごとに髪が抜けたりしないか？」

「しない」

「くっ……！」

セフィロス即答。サイタマ悔しみ。
サイタマは気を取り直した。
「じゃあ強くなるごとに感情が希薄になったりとか、強いやつと戦いたいとか、そういうのはねーの？」
サイタマの顔は呆けたものだ。真面目腐った顔でもなければ、真摯な瞳でもなかった。
だがセフィロスは何か感じるものがあった。それがサイタマに対してか、それとも己に対してなのか判然としなかったが。
だから真面目に考えてみる。それを表に出しはせずに、明晰な頭を回転させる。
まず一つ。
「感情が希薄になった、とは感じていないな」
ヒーロー協会に所属してからは、様々な柵の下で感情を隠すことは多くなった。だが、それだけだ。希薄になった、とは断じて言えない。
次の強敵と戦いたい、ということ……。
「強敵とは……戦ってみたいかもな」
想起するのは未だ実験体でしかなかった頃。
繰り返される実験と観察。それらは一つたりとも穏やかではなかった。全てが過激

にして過剰。セフィロスの心身を切り崩していくかのような日々であった。
手術台の上で過ごした次の日、己の身に内に感じる違和感、異物。そんなものは当然の如く。
拘束具を着用しての生活など、それ自体が日常となっていた。
そんな日々の中、行われる実験と観察は手術台の上で行われるものだけではなかった。
それも実験であり、観察であったのだろう。
――闘争を知った。
――勝利を知った。
――そして、己を知った。
なんのことはない。ロボットや怪人を相手にセフィロスを戦わせたのだ。
ときにはセフィロスより弱い相手。ときには強く、ときには同等。
戦いの舞台でのみ、セフィロスは自由だった。目には映らぬ枷をつけられながら、それでも戦うときのみ手足を己の意思で動かせた。
だからだったのかもしれない。
久しく感じた喜び。それは果たしてどちらのものだったのか。自由に対してか、それとも闘争に対してか。どちらで喜びを感じていたのか……。

セフィロスは過去を思い出す度に分からなくなった。
敵と戦っていたとき、こんなところで死ぬものかと死に物狂いだったのは覚えている。
勝ったときも、喜びではなく安堵したのは覚えている。
だが――そうだ。
戦いの中で喜びも確かにあった。自由の喜びとは別に、確かにあったように感じている。
それは決まって同格か、格上の敵と戦っていたときに感じていたように思う。
己より強いものと戦うことが楽しかったのだろうか。
なんだそれは。まるで戦闘狂のようではないか。そんなことは断じてない筈だ。現に今もそんな兆候はない。
あれはどちらかと言うと、戦いの中で己が錬磨されていく感覚が楽しく、それが喜びとなっていたような気がする。
窮地にあって、成長していると感ぜられることが嬉しかったのだ。
だがその根幹はなんだったか……と考えようとしたところで。
「おーい、どうしたんだセフィロス?」
呆けた顔のサイタマが声を掛けて、その声でハッと現実に帰るセフィロス。

見ればサイタマのコーヒーは無くなっていた。それだけの時間、思索に耽ってしまったのか。

だがそれよりも。セフィロスはサイタマの顔を見て、考えた。

サイタマは強い。今まで見たことがないほどに。誰もを超越した強さを持っている。

そして己もまた……。

ふと、今日はサイタマと戦う予定だったのだとセフィロスは思い出した。

ここで掘り返すのもどうなんだと思いつつ、しかし思ってしまえば止まらない。

――サイタマと戦えば、思い出せる気がする。

自身と同等か、もしくはそれ以上の強さを持つサイタマとなら……。

「なんだ？　そんな悩むような質問だったか？　なんつーか意外――」

「サイタマ」

サイタマの言葉を遮ってセフィロスは言った。

「――約束を果たそうか」

セフィロスの瞳には、少しだけ危険な光が宿っているような……いや、気のせいなのか。

よく分からず、サイタマは即答した。セフィロスの顔を見て、そうしなければならないように思えたからだ。

「ああ、いいぜ」
サイタマはキメ顔だった。
しかしてその内心は。
（なんか約束したっけ……？）
やっぱりサイタマだった。

◆

今日は折角の休みだ。その筈だった。でもなんか知らんが怪人が徒党を組んで侵攻してきおった。
そしてS級のジェノスくんに救援要請。それに着いていくらしいサイタマくん……。

ゆ　る　さ　ぬ　！

何が許さんって、こんなにときに限ってワラワラ出てくる怪人だよ！　なんで今日なんだよ！　俺が休暇とってんだからお前らも休暇しとけ！

そして一人寂しく待つのも嫌だから二人を追って行きましたよ。

でももうクライマックスだったの……。

殺られそうになってるジェノスくん。けれどそこへ向かってきていたサイタマくん。

あれ？　これ絶対に俺お邪魔じゃね？

いいんだ、やっておくれよサイタマくん。

そしてワンパンで白目を向く怪人。

何もしてない英雄（笑）。

つーか言われたよッ!!

市民に言われちゃったよッ！

まあその通りなんですけど!?

へへっ、なんとかその場を切り抜けたかったからテキトーにやっといたらなんとかなったっぽいぜ（白目）

まあ気を取り直してこれから遊ぼうぜ！　ってなったんだけど、ここ街中だし手合わせみたいなことは出来ないしなぁ……どうすっかなー。ってなってたとこで良い行き

先が出来ました。
なんと！　我が恩人のクセーノ博士ん家!!
っていうかジェノスくんも俺と似た境遇かよ！　同志よ、これからも仲良くしようね。というかこれ、一種の義兄弟と言えなくもないのでは（迷推理）
俺のこと、お兄ちゃんって呼んでもいいんだぜ？
まあそんなことが判明し、じゃあクセーノ博士ん家が近いしそこでちょっと遊ぼうかなって思ったんだ。
んで着いてから感動の再会をした。
クセーノ博士には一応言っときたいんだが、ちゃうねん。帰らなかったんとちゃうねん。帰れなかったんや。仕事がブラック過ぎたんや（）
でもこれ言うとなー、ちょっと言い訳っぽく聞こえそうだしなー。変な心配もかけたくないし、うん、止めとこ。
そんでジェノスくんをクセーノ博士が直すまでノンビリしてようかなって思ってた時に事件が起こった。
「じゃあ強くなるごとに感情が希薄になったりとか、強いやつと戦いたいとか、そういうのはねーの？」
サイタマくんにそう聞かれたんだ。

ハッ!!?

そんな衝撃が俺の中に生まれた。俺が忘れていた何かを思い出させるような、そんな衝撃だ。

でも思い出せない。

なにか……そう、とても大事なことだった筈なんだ。

俺の中でとても大事な……。日々の仕事で忙殺（比喩じゃない）されそうな中、少しずつ忘れていってしまった何か……。

思い出せずにぐるぐると回る思考の中、サイタマくんに声をかけられ現実に戻る。そしてサイタマくん見てビビっと直感が震えた。

なんかサイタマくんと戦ったら思い出せそう（脳筋）

ここクセーノ博士ん家だから耐久に優れた実験室とかあるし、ちょっとやんない？

（物理）

ってことでクセーノ博士に許可貰ってやって来ました実験室ゥ！　ふはは！　なんかテンション上がってきたぁ！　でもここ壊したらダメだから本気でやらないでね？

（震え声）

そうやって一応保険をかけつつサイタマくんとレッツバトル！

あっ……あっ……なんか思い出せそうぅぅぅう！

でもなんだっけ（）
思い出せそうで思い出せない！
ジレンマ！　焦れったい！
つかサイタマくん避けれない攻撃を腕とか足で防いでるけど、なんでそれ大丈夫なの？　俺、刀で攻撃してるんだけど？（白目）
一応どっちも本気じゃないとはいえ、サイタマくん普通じゃないわ、やっぱ。
まあ服が切れてからは全力で避けてるけど。
もしかして服の性能が凄かったのかな。あっ、やっぱなんでもない。頭に諸直撃したのにピンピンしてるわ。すごーい（）
それに何このサイタマくんのパンチ。
やだ、こんなの初めて。これ本当に手加減してる？
そんな感じでやりあってたら、いつの間にか熱が入ってたらしい。どんどんお互いセーブしていた力を解放していき、しかし最後まで決着は付かなかった。
全力を出すまでもなく、クセーノ博士からストップがかかったのだ。
それに、気付いたら研究室が瓦礫の山に変わりそうだったこともあり、俺たちの戦いはそこで終わってしまった。
けどね、それでも良かったよ。

なぜなら、そう。

――思い出せた。

サイタマくんと戦ったお陰で、俺は思い出せたんだ。とても大事にしていた思いを。人生の目標を。いや、これは信条であり、信仰だ。

俺はセフィロスだ。

セフィロス・クレシェントだ。

誰がなんと言おうと、中身が違おうと、この身体は紛れもなくセフィロスなんだ。

そしてそれを認識していく内に、俺はその想いを抱いたんだ。過酷な実験の中でも、確かに芽生えたんだ。

その想いを思い出し、胸に秘めながらも、その後みんなとお喋りをしてから解散の流れとなった。

クセーノ博士は泊まっていけばいいと言ってくれたが、明日からまた仕事があるため丁重にお断りさせて頂いた。ごめんよクセーノ博士。

なんとなく夜風に吹かれて帰りたくなり、俺は一人で歩いて帰路についた。

夜空を見上げて、そこに瞬く星を今までにないほど綺麗だと思った。

そういえば、最近は空を見上げることもしていなかった気がする。

これも全ては想いを思い出せたからかもしれない。

そうこの想い……。

――俺のセフィロスは最強なんだッ！

この崇高なる想いを。

ふっ。本当にいつからかな。忘れていたのは。

この初心を思い出させてくれたサイタマくんには感謝しかないぜ。

今度お礼に行こう。

だがまずは……やらなければいけないことがある。

俺のセフィロスは最強なんだッ！　これを仮に『プロジェクト・S』としよう。

この『プロジェクト・S』を完璧にするためには越えなければならない壁がある。

忙しさのあまり気付かなかった、とても重大な要素だ。

それを乗り越えるために俺はどんなことでもやろう。悪魔にだって魂を売るさ。外道非道もこなしてみせよう。

そう！

――アトミック侍とセフィロスのキャラ被りを防ぐためならなッ!!

刀を使い、一振りにしか見えないのに、一瞬にして幾閃もの斬撃が繰り出されている？

これダメなやつやッ！

諸に被ってる！　ダメ！　絶対ダメ！
刀はいいとしても、攻撃方法が一緒やん！　流派とかあるかもしれんが端から見たら一緒にしか見えないよ！
くそったれぇ！
アトミック侍め、どうしてくれようか……ッ！
だが、いい。乗り越えてくれようぞ！
セフィロスに不可能はないと教えてやるわ！
待っていろ！　アトミック侍ッ！
「約束の地は……渡さない」
最強はセフィロス！
被りなんて許さないんだからねっ！

異能研究会副会長

昔話を一つ聞いて欲しい。

あれはまだ私が弱かった頃のことだ。ヒーロー協会もなく、我らが怪人協会もなく、現れた怪人に民衆は怯えることしか出来なかった頃のことだ。

そのときに怪人に対処をするのは警察、もしくは民衆の中に紛れる超人たちだった。

災害レベル【狼】程度の弱い怪人ならば警察でも対処が可能であった。それより上にいけばその道のプロフェッショナルか、人の身を越えた超人が必要だった。

奇しくも私は超人に類される側だったが、しかしその力も当時は高が知れていた。凡人に毛が生えた程度。はっきり言って雑魚だったよ。

けれど力の探求には貪欲であったようにも思う。しかしその貪欲さも仮初めでしかなかった。

それを知ったのはある日のなんてことのない日常に訪れた脅威と、それを打ち払ったあの人を見てからだ。

Ｓ級１位ヒーロー。英雄セフィロス・クレシェント。

今ではそう呼ばれているあの人を。

鮮烈だった。

突然現れた怪人。民衆に揉まれながら逃げ惑う私。そんな無様な私の前に現れた英雄。

当時の私にとっては恐ろしく感じた巨大な怪人を、一刀の下に打ち倒す英雄。

数多の群衆の中にいた冴えない私など彼の目にはまず留まらなかったことだろう。それでも私の目は彼に釘付けだった。いや、当時そこにいた者たちは皆が彼に目を奪われていたか。

流れる銀の長髪は眩く日の光を反射し、蒼の瞳は空を内包していると錯覚させるほど澄んでいた。服の上からでも分かるスラリと伸びた肢体は黒の特徴的なコートに包まれ、左手には彼の長身をも越すのではと思わせる長刀。

民衆の危機に現れ悪を討つ。

正しくヒーローだった。だがヒーローであってヒーローでない。皆が真っ先に思い描くであろうテレビでやっている作り物ではない、得も言われぬ神聖さがそこにあるような気がした。

ヒーローだ。だがヒーローではない。

――――英雄だ。

彼こそが人の中で最も秀でた存在であり、伝説となるべき存在なのだ。そしてその在り方。その美貌。その強さ。英雄と呼ばずして何と呼ぶのか。

私はその一件から彼のことを調べ始めた。そして時間をかけて集めた情報は相当な量になった。

当時はなかったヒーロー協会とヒーロー制度だったが、なんと彼はそのときから人助けをしていた。

只人には打ち勝てぬ凶悪な怪人を倒し。賞金がかけられる程だが誰にも捕まえられぬ犯罪者たちを捕らえ。大荷物を運ぶ老人がいれば荷物を持ってやり、はぐれてしまった親子を見留めれば引き合わせてやる。

他にも出る多くの情報と感謝の言葉は軽くネットで調べるだけで集められた。

一目だけ見た彼の印象と全く相違のない人物像。

何故これほどの人物がいることを知らなかったのか。以前から同じように活動していたらしいが、私は全く知らなかった。超能力くらいしか興味がなかったから、話がどこかで出ても右から左だったのだろう。

少しだけ自身を恨んだ。

しかし彼の個人情報に関してはあまり集まらない。色々と聞いてみた者もいるそうだが、彼はどうやら饒舌な方ではないらしい。

同時期に私はそれまで手を抜いていた美容やファッションについても学び出した。彼に接触するにしても、今の自分ではいけないと思ったからだ。

端的に言って一目惚れしていた。

恋とは人を盲目にさせるとよく言うが、私はその言葉の通りだった。

彼に会いたい。彼の隣に立ちたい。彼と話がしたい。どんな過去を持っているのか知りたい。どんな思考思想をしているのか知りたい。好物はなんだろうか。嫌いなものは。好きな女性のタイプなんかも。

そのためには自分を磨かなければならない。私は私より魅力的な女性が多いことを知っているし、私なんかより力を持った者が多いことも知っている。

幸運だったのは、そんな存在が身近にいたことか。

B級1位ヒーロー。地獄のフブキ。今はそう呼ばれている女。

彼女は私より強力な超能力を持っていた。

彼女は美容にもファッションにも拘っていた。

彼女は容姿にも優れていた。

彼女を尊敬していた当時の私は、彼女を目標に据えて自分磨きを始めた。

そんな時だ。

未来にて本当に英雄セフィロスの隣に私が立てているのか。それが気になってし

まった。
私は予知能力の訓練を始めた。これが完成すればかの大予言者シババワのように未来を見通すことが可能になる。
――――しかして、未来には栄光などなかった。セフィロスの隣に立つ私などいなかった。
なんだこの未来は。こんなものなど求めていない。こんな絶望の未来など……！
だがふと気付いた。
私の見た未来に英雄セフィロスの姿がない。どういうことだ。未来に行き着くまでに英雄は倒れてしまったのか。
有り得る。
今でさえセフィロスは人類のために身を粉にしている。
あんな食って糞して交尾して増えるだけ増えて何もしない現状のホモサピエンスのために英雄は食い潰されるのだ。
でなければ未来においてセフィロスの姿が確認出来ないなどあり得ない。
あの圧倒的な力を持つセフィロスが存在しないなどあり得ない！
駄目だ。今のホモサピエンスには絶望しかない。減らさなければ。滅ぼさなければ……！　セフィロスを食い物になどさせない。

私が変える。この絶望の未来を……！

待っていて欲しい、セフィロス。貴方は私が救ってみせる。そのためには力がいる。個人の力。集団の力。それらを圧倒する大いなる力が!!

尊敬していたフブキ会長は私の話を聞き入れずに決別してしまう結果となった。

いいさ。私一人でもやり遂げてみせる。

そのあとだ。

私は一人の素晴らしい才能を持った人間を見つけた。私の超能力は相手の実力や才能までも見通す程に成長していたからだ。

怪人王オロチ。

今はそう名乗る元人間。

彼を見つけたときは運命だと思った。

やはり私の考えは間違っていない。人間は滅びるべきなのだ。天も私に味方している。

この出会いは私にそう思わせ、更なる邁進を後押ししてくれているようだった。

自らが汚れても構わない。未来に希望などはなく、一握りの救いすら用意されてはいない。ならば私が変えるのだ。

これはそう、覚悟だ。

なんとしてでも。何をしてでも。血に濡れようとも。悪としていつか討たれるとしても。

私はこの覚悟と共に進んで行くのだ。

――人に見切りをつけ、怪人に焦点を当てた。

――怪人化の秘を暴くため動き出した。

――生物の限界を超えて進化する方法を探した。

――役に立たぬ、むしろ我が障害となるだろう名ばかりヒーロー共を駆逐する計略を練りだした。

ふと気付く。

このまま行けばいずれセフィロスともぶつかる事になるのではないか？

現在彼はヒーローであり、そのトップに立っている。誰よりも人の為に奮闘している。それが人の為にならないことを知らずに……。

いや、彼に罪はない。未来を知る術など本来ありはしないのだから。大予言者シババワですら私の見た未来を知っているか怪しいのだから。

ならば彼を救う第一歩はなんだろうか。

私は彼の周囲を変えるために行動を起こした訳だが、出来れば彼自身にも正しい未来を歩んで欲しい。

――――そうだ。彼にはヒーローを辞めて貰おう。
簡単なことだった。未来を変えようと動いている私。そこにセフィロスが協力してくれれば、より未来改変は磐石になる。
このまま人間共にセフィロスが食い潰されることもない。
彼を救う道もより確実なものとなる。
……ふむ。
いいじゃないか。いい！　とても素晴らしい！
この方向で案を練っていこう。
彼に直接接触する必要も出てくるだろう。勿論その役目を他に任せる気は微塵もない。怪人などどいつもこいつも品のない無知蒙昧ばかりだからだ。
ああ。待っていてくれ。必ずや貴方に救いをもたらそう。
英雄よ。あなたに悲運は似合わない。
――――どうか、私の隣で微笑んでおくれ。

Ａ市壊滅

その日、Ａ市は消滅した。
順を追って話そう。
その日は大予言者シババワが死の間際に残した言葉を重大視した協会職員によってＳ級ヒーローたちが集められていた。
大予言者シババワは大きな災害を予知することのできるエスパーであった。全ての災害を予知することは出来ず、然れどその予知は的中率１００パーセント。
それを重要視した協会はシババワを守り、協会に協力してもらうべく彼女を抱き込んだ。
そんな大予言者が死んだ。ヒーローたちの間に激震が走った。
死因は喉に飴を詰まらせたこと。だがその原因が問題だ。
予知的中率１００パーセントのシババワが最後に占いを行い、その結果に動揺して喉に飴を詰まらせたのだ。

その内容は最後の力を振り絞ったシババワがメモ書きを残したことで、協会職員並びに本日集ったS級ヒーローたちに知れ渡った。

メモ書きには『地球がヤバい』とただ一言残されていた。

S級2位ブラストとS級7位メタルナイト以外の集まったS級ヒーローたちと、何故かいるB級に昇格したサイタマ。そして協会職員のシッチはメモ書きについて言葉を交わした。

その途中、堅牢な協会本部に集まった彼等の鼓膜を、大地震のような轟音が幾度となく震わせた。

時間にして数秒か。鳴り止んだ後の静寂が嫌に場を圧巻するようだった。

「うわあああああああああああああ!!!!!!」

机上にA市の立体ホログラムを立ち上げたシッチは悲鳴を上げた。当然だ。何故なら。

「まさか今すぐ予言のときが来るなんて誰が予想できる!!?　A市が……一瞬で壊滅したらしい！」

「おい！　何故この建物は無事なんじゃ!?」

「この本部の建設はメタルナイトに依頼して並のシェルターより強固にできている！だが外は壊滅だ！」

A市はすでに壊滅していた。一つの市が一瞬にして瓦礫の山へと変わっていた。仕方がない。仕方がないのだ。

常人にすぎないシッチが取り乱すのを誰が責められよう。だが彼は協会職員。仕事を遂行しなければならない。

そしてそれはヒーローたちも。

「――落ち着け」

それまで口を開かなかった男が言葉を放った。言葉は波紋のごとく広がり、次瞬には穏やかな水面が出来上がっていた。

「セフィロスさん……」

S級6位童帝が期待の眼差しを向けた。

本日集まってから多少の言葉をヒーローたちと交わし、しかし会議が始まってからは一言も喋らなかったセフィロス。

一言も喋らなかった者はそれなりにいたが、彼は目を閉じて何があろうと動揺の一つも起こさなかった。A市壊滅の初動である、大振動が起こったときでさえ、だ。

皆が少なからず動揺や焦燥、疑問を心に据えている中。一人落ち着いたまま座し、机の上で組んだ手をそのままに瞼をゆっくりと開いた。

「シッチさん。ヒーローを緊急収集。生き残った市民の救出を」

「あ、ああ……。セフィロス君は出るのかね…？」
組んだ手をほどき、立ち上がりながら彼は言った。
「当然だ」
コツリと足音を鳴らし、バサリとコートが棚引く。
うっすらと笑みを浮かべて背を向ければ、彼は颯爽と歩き出した。
「戦う意思のある者は付いてこい。怖ければ――逃げても構わない」
その瞬間、S級ヒーローは、職員は、顔を引き締め心を昂らせた。
プライドを刺激された者。自負を思い出した者。己の役割を全うしようとする者。
勇気を抱いた者。
様々な心境だろう。だが、ここに怖じ気付く者はいなかった。
「まあ……すでに事は終っているかもな」
雷鳴のごとき速度で天井をぶち破り出ていったハゲ頭を思い浮かべ、誰にも聞こえることの無い独白をセフィロスは溢したのだった。

◆

S級ヒーローたちは協会本部を出てから三手に分かれた。
すぐさま戦場へ駆け付ける者たち。
協会本部屋上から状況確認を行う者たち。
出番は無さそうだと早々にこの場を去る者たち。
セフィロスはこの中で二つ目を選択していた。
眼下の戦場には意気軒昂たるS級ヒーローが4人。相対するは怪人たったの一人。
S級ヒーローたちは危なげなく立ち回り、怪人の攻撃を受けてもダメージはそれほどないようだ。
セフィロスは自分に出番が無いことを悟り、その視線を上空へ向けた。
「……相当な巨艦だな」
セフィロスが呟く。S級ヒーローでも墜とすのは難しいと思わざるを得ない程に巨大な宇宙船故、どうしたものか思考する。
「あれを墜とすのはセフィロスさんでも難しいですか……。確かにあんな上空じゃ手が出せない。乗り物を用意しても一瞬で撃ち落とされるでしょうね」
童帝はセフィロスの言葉をどうも勘違いしているらしい。
セフィロスの発言は何も考えず思ったままを言っただけなので無視してよかったの

だが、深読みする天才少年童貞。君これから苦労するぞ。
「キングさん。S級でもトップだと言われているあなたの意見が聞きたいな」
言ったのは超合金クロビカリ。トップがいるこの場で言うとは……！　地上最強の男も顔を引き吊らせて……いや不敵に笑っているようだ。
やっぱ見間違いだった引き吊ってる。けれどそれは上位世界の者どもにしか認識できないので問題ない。よかったねキングさん。
「……俺は何もできん。あんな上空に構えられたのでは攻撃する手段がない。メタルナイトに救援を求めるのがいいだろう」
「何よそれ!?　情けないわね！　あんたそれでも最強の男なの!?」
緑髪巻き毛のチビガキが怒りの声を上げた。S級3位のタツマキだ。子供に見えるが御年28歳のでぇベテランだ。よろしくな！
ちなみにタツマキと関わるほとんどの者は彼女とよろしくしたくない。それは先の発言で理解して頂けたと思う。
だってこいつ、いつもこんな感じなんだもん。
その後すぐにタツマキが一人で片付けるなんていうワンマンプレイを発揮しようとした。
おいお前それでも28歳の社会人かよ。だから童貞な童帝にフブキさんの妹って思

われるんだぞ！
だがそこは流石にトップから待ったが掛かった。
「タツマキ」
「何よ！」
キレすぎである。
しかしセフィロスも慣れたもの。ヒーロー協会設立から三年間同じ職場で過ごしたのだ。扱いには慣れている。
「宇宙船の真下とその周囲にいる生存者を救ってくれ。お前にしか出来ないことだ。やれるか？」
デレがなく、ツンしか存在しないタツマキは持病（仕事中毒）を発揮する。
実は『お前にしか出来ない』とか言われると即堕ち２コマしちゃう系のクソザコナメクジだったのだ！
「はあぁ？　何よしょうがないわね！　その程度あたしに出来ないと思ってるわけ!?簡単過ぎて欠伸が出る前に寝ちゃうわ！」
「助かる」
素っ気なく返すセフィロスだが、その表情は菩薩のようだった。
セフィロスはタツマキのことを、超能力を持った幼女だと思っている。なら我が儘で

高飛車になっても仕方ないと考えている。なんでも自分の思い通りになる力があれば、大人でさえそうなっても仕方ないだろうと勝手に納得している。あまつさえ、大人の自分がタツマキをいい方向にそれとなく誘導教育してあげよう、とか目標を作ってしまっている。

止めておけ。そこから先は地獄だぞ……！

セフィロスの思考は全て勘違いで明後日の方向にフライアウェイしているのだが、残念なことにそれを指摘してくれる者はいなかった。

取り敢えず君たちはコミュニケーションのキャッチボールをしようね！

「タツマキさんに人命救助を優先させるということは何か手があるんですね、セフィロスさん」

「ああ」

キラキラお目々の童帝が笑顔で言った。あまりその男を盲信しない方がいいと思いますよ。

しかし力だけは本物なのがこの男。非常に性質が悪い。

「――私が斬ろう」

多分サイタマが真っ先に突撃したこと忘れてるよね。

そう突っ込んでくれる者はいなかった。

そこからの動きは迅速だった。
タツマキが超能力で町を更地にし。
クロビカリはテカテカと光を反射し。
童帝はお目々をキラキラ光らし。
キングは静かに船を見上げた。
そしてセフィロスの放った斬撃が宇宙船を輪切りにした。
「――――ぬおぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ!!???」
宇宙船の真下で戦っていたヒーロー達が驚くべき速度で退避する。
彼等がこの程度で死ぬわけがない。彼等こそ超人。ゆえに事前に宇宙船を墜とすことなど伝える必要なし。
面倒臭かったわけではないだろう。適当に避けてくれるでしょとか考えていた訳でもないだろう。
ただ彼等のことを誰も考えてなかったんだろうなぁ……。人はそれを忘れていたという。
墜ちた宇宙船は盛大な轟音と土煙を上げ、その超高度な光を絶やす。
誰もが驚くべき結果と相成った。
しかし更なる驚愕は生まれる。

「なんだ？　宇宙船墜ちたのか？」
「……この船を輪切りにするとは。この星は粒揃いだな」
宇宙船の残骸から傷一つなく現れた二つの影。
一人はB級ヒーローのサイタマ。
一人は宇宙海賊の首領ボロス。
今起こったことなど些事としか捉えていないのか。比類なき強者共に微塵の揺るぎ無し。
驚愕したのは周囲のS級ヒーローたちだ。
「なんであのハゲがあんなとこにいるのよ!?」
「あの人は会議のときにいた……」
「ありゃ敵のボスか？　斬りがいがありそうだ」
そんな周囲の反応など知ったことかと二人は拳を振るい戦い始める。
超スピードの戦闘はS級達ですら何が起こっているのか分からない程。
辛うじて影を追う。それすら困難であった。
ボロスが疾走すれば地面が抉れ、その拳を振るえば大地が鳴動する。
特別な肉体から放たれた強烈な攻撃だった。
「いい動きだ！　流石に強いな！　このボロスと互角に戦える者はお前が初めてだ

！」

言うと同時、ボロスの身体に稲光が走る。それは内に秘めるエネルギーの発露。

「はあッ」

気勢と共に放たれたるは一筋の光。端から見ても分かるエネルギーの奔流。

「体内にある莫大なエネルギーの放出！　雑魚がこれに触れれば骨すら残らん！」

光は高熱を伴い、崩壊した市街を焼き付くしサイタマを飲み込んだ。それどころか後方へと存在する瓦礫も、宇宙船の残骸すら飲み込んで大爆発を起こす。

あとには土煙が辺りを包み込む静寂な空間が形成され、二人がどうなったのかヒーローたちには認識できない。

「後ろだ！」

鋭い声と共に、響き渡る鈍重な音がした。

煙に巻かれる声の出所へヒーローたちが目を凝らせば、後頭部に打撃を叩き込む影と、叩き込まれた影が見えた。

棚引くマントと特徴的な禿頭は動かない。嫌でも誰が攻撃を受けたか周囲に知らしめた。

「先生ッ！」

ジェノスが叫ぶ。すぐに駆け出そうとして、それを止める者がいた。

「待て」
セフィロスだ。
彼はジェノスの肩を掴み、一歩踏み出した足をこれ以上進ませまいとしていた。
「何故止める！」
「行く必要がないからだ」
その眼差しはどこまでも怜悧。思考も判断力も冷静極まりないことを思わせる。故にジェノスは踏みとどまった。
「いい判断だ」
微笑と共に放たれた言葉。セフィロスはその視線を晴れていく土煙へ向けながら、童帝へ尋ねた。
「童帝。あの怪人の災害レベル、幾つと見る？」
童帝は冷汗を流しながらも、天才と名高い能力に見合う意見を口にした。
「災害レベル竜は硬いと思います。S級でも確実に勝てると言えるのは数人かと」
S級ヒーローは災害レベル鬼以上を単独で相手取ることが可能なヒーローの集まりだ。故にその強さにもばらつきがある。相性もあるだろう。
ボロスと名乗った怪人は秀でた格闘能力に加えて脅威的な遠距離攻撃を有している。
童貞はS級ヒーローたちの能力と戦果及び戦闘情報を照らし合わせて分析を熟して

見せた。それは限りなく正しい分析結果だ。
災害レベル鬼以上竜未満を対処可能なS級が出ても、まず地力と能力の差は埋められず敗北するだろう。
――――ボロスが現在の状態ならば。
「メテオリックバースト！」
ボロスから吹き出したエネルギーが土煙を完全に払いのけ、その変貌した姿を露にした。
先ほどより明らかに増えた圧。感じるエネルギーの波動。それは誰が見ても強化されたとしか考えられない姿。
ボロスの姿が掻き消える。ただの踏み込みは、ヒーローたちの視界からボロスの姿を消し去った。
現れたのはサイタマの眼前。その時には振り上げられていた拳が振り抜かれ、サイタマ諸共に前方全てを吹き飛ばした。先程のエネルギー波よりも大きな被害を拳の一振りで生み出したのだ。
吹き荒れる旋風は周囲のヒーローたちの頬を撫でる。
「駄目じゃな。ありゃワシの手に負えんわい」
ぶつかるサイタマとボロスを眺めながら、シルバーファングが合流し呟いた。後ろに

はアトミック侍、金属バット、ぷりぷりプリズナー、そしてA級2位のイアイアン。
「おいセフィロス、こいつを頼む」
声をかけてきたのはアトミック侍。横に控えるは弟子のイアイアン。
アトミック侍は頭を下げていた。
「師匠！　何故!?」
いきなりの師の行動にイアイアンは驚いていた。無理もない。いつも飄々としている我の強い師が、いつになく真剣であったから。それは剣に関する事柄と向き合うときに見せるアトミック侍の真摯さと比肩し得るほど。
「お前は他者の傷を癒せると聞いた。イアイの腕はもうない。だがお前ならもしかすれば癒せるんじゃねぇかと思った。無理は承知だ。俺に出来ることならなんでもする。だから駄目元でも、こいつを治療してやって欲しい」
頼む。そう言ってアトミック侍は再度頭を下げた。イアイアンもまた無言で頭を下げた。師が己のために頭を下げた。それが何を意味するか分からぬ男ではなかった。
「頭を上げてくれ」
セフィロスの言葉にアトミック侍とイアイアンは頭を上げた。セフィロスがイアイアンの前に立ったことで、施術を施すつもりなのだと察したからだ。
セフィロスはイアイアンの血止めの布を外し、呻き声と吹き出す鮮血が二重奏を奏で

る中で一言唱えた。手早く、一瞬の出来事であった。
イアイアンは片腕を失い、失血も多い。それは戦闘不能の状態。故に。
「――アレイズ」
傷口に当てたセフィロスの掌。そこから暖かな陽光にも等しい、穏やかで力強い光が放たれた。
セフィロスの持つ最上位の回復魔法。蘇生に近いその魔法はイアイアンを完全無欠に癒してみせた。
セフィロスは考えたことがある。回復魔法とは傷を癒し体力を元通りにしてみせる。ならば回復魔法とは本人の治癒力を促進させるのか、と。
答えはノーだ。治癒力を促進するということは細胞分裂を活性化させるということ。ならば人は恐ろしいほどのエネルギーを一瞬で使うことになり、むしろ体力を失う。最悪は死に至るだろう。だが結果はそうではない。傷を癒し、体力も回復させる。つまり、全てをセフィロスのエネルギーによって補填しているということに他ならない。
故に細胞分裂による傷の治癒ではない。まさしく魔法。人界から外れた超技法。
「――な、んと……」
だれの言葉か。驚愕し、茫然自失としている声。それも仕方ない。イアイアンの無くなった腕は、そこにあったのだから。当然のように、傷など一つもなく。

アトミック侍は無言で頭を下げた。イアイアンも同じく。
セフィロスはサイタマとボロスの戦いを再度眺めながら二人に言った。
「なんでもする、か」
頭を下げる二人が覚悟を固めた。英雄と呼ばれる男が無償で人助けをするのは有名だ。だが二人は英雄と同じくヒーローだ。無辜の民ではない。無償で助けられるなど、むしろ拒否する。助ける側であり、力を持つ者としての矜持がある。
アトミック侍は特に。己の認める数少ないヒーローからの施しなど認めないだろう。彼は己の認めるヒーローたちを戦友だと思っている。戦友であり、戦友であると。
だから英雄の言葉は少し嬉しかった。そして不満だった。
「旨いたこ焼き屋があるんだ。今度奢ってくれ」
もう一度言おう。
英雄は無償で人助けを行う。無辜の民へ――。

向かう先は

ボロスは敗北を確信した。

目の前の恐ろしく強い男の戦士。遠方から様子見に徹している船を輪切りにした戦士。そして部下の、それも幹部を打ち破った戦士たち。

目の前の男だけでも勝負は決まったようなものだというのに、更に後続が控えている現状を楽観視するほどボロスは鈍い頭をしていない。

ならば、と。彼は全力を出すことにした。目の前の男には、全力をぶつけたくなった。

「———メテオリックバースト」

全力の踏み込みからの拳打。それだけで前方を諸共に吹き飛ばし。

全力の蹴り上げはサイタマを月まで吹き飛ばす。

冗談のような威力。しかしそれを受けたのも冗談のような男、サイタマ。

サイタマはなに食わぬ顔で地球へと戻ってきた。サイタマの表情は変わらない。

攻撃を受けて吹き飛ばされようが、大地に埋まってしまおうが、彼は平然と起き上がって一発のパンチを放つのだ。彼にとっては大して力を込めていない普通のパンチを。

一発。胴体に穴が開く。

その時点でサイタマは認識した。これまでの怪人よりちょっとだけ強そうだ、と。

「連続普通のパンチ」

恐ろしい威力の拳打が十数発。

ボロスの体が弾け飛んだ。比喩でもなんでもない。文字通りに五体四散。いやそれ以上に粉々に砕かれてバラバラになったのだ。

しかしそれはすでにボロスにとって既視だった。焦りなどなく、瞬時にバラバラになった体を繋ぎ止め傷を癒す。恐ろしいほどの超回復能力だ。

だがボロスは限界だった。傷をいかに癒そうが、失った体力は戻らない。何より現在の状態、メテオリックバーストは無呼吸運動に等しい負担の大きな技。

彼は次の一撃に全てを賭けることに決めた。己の全身全霊を込めた最強の技。

ボロスを中心に稲妻が轟く。大地が泣き叫んでいるかの如く鳴動する。サイタマも拳を握り締め、ボロスを見据えた。決着の時だ。誰もが予感する。

「――――崩星咆哮砲!!」

最後の攻勢。

命を賭した、覚悟の一撃。

――だが、その攻撃が放たれることはなかった。

「貴様……は……」
気付けば銀髪の男が目の前にいた。手に持った武器を振り抜いた状態で。
全てを賭した最後の一撃。それを邪魔するような不粋を働いた男。本来ならばそのようなことをする男ではないのだが……。
銀髪の男、セフィロスは二人の攻撃によって、下手をすれば国が滅びると察してしまった。故の不粋な横槍。
だがどんな理由があろうと関係ない。ボロスは無念の最中で意識を失った。
最後に放たれる筈であったエネルギーはボロスの意識が無くなると同時、霧散するように空へと融けて消えていった。
「悪いな、サイタマ。今のは流石に見過ごせなかった」
振り返りセフィロスが言った。だがサイタマは余り気にしていないようだった。鈍い彼もあれだけ戦えば彼我の実力差は感じ取れたようだった。
「そっか」
握り締めた拳を解いてセフィロスの側まで歩み寄ると、サイタマは珍しく他人を気にするような疑問を放った。
「そいつ、どうすんだ?」
「捕虜扱いだな。なに、怪人ではないし悪いようにはしないさ」

「え、そうなの？」
「怪人ではなく宇宙人だろう」
へぇー。なんて、気のない返事をするサイタマ。安定の平常運転であった。
「なによ。そいつ生かしとくわけ？」
タツマキだ。
どうやら他の面々も集まってきたようで、近くではA級以下のヒーローたちも集まっており、船内にいた宇宙人たちを捕縛して回っている。どうやら近くに待機していたが、戦闘が激しすぎて近付けなかったらしい。
セフィロスはヒーローたちに説明をすることにした。彼自身が知る怪人についての知識。とあるたこ焼き屋で知り合った学者の男からの受け売りを。
怪人とは何か。その定義。怪人とそれ以外を隔てる基準。怪人以外の生物の存在。そして何より……怪人の発生条件と、その大元となる生物たち。
そんな彼等を、いや、その中心にいるセフィロスを観察するが如く送られる視線があった。
皆がセフィロスに視線を向けている中、それに紛れ己を影に潜ませる存在。
敵意なし。害意なし。悪意なし。
敵対者へ送られるような感情は全く感じられなかった。

むしろそこには親愛があった。敬愛があった。情愛があった。
故に誰も気付かなかった。
仲間を見る視線を、敵対者と思うのは難しいから。
近しい存在であったなら、感情、思想、言動といった要素から何かを読み取れたかもしれない。
例え仲間を見るような視線であったとしても、そこに隠れ潜む過激思想や言動の矛盾に気付けたかもしれない。
心理学の観点から見ても、人とは自分自身を客観視することが困難だから。
本人は隠せているつもりでも、周囲から見れば分かり易い程に違和感を覚える。そんな事は往々にして起こり得るから。
視線の主はそういった様々な要素を、細心の注意を払って考え抜いていた。
リスクとリターン。メリットとデメリット。それらを生物学や心理学の観点から測量し、己の目的を達成するための手札を作り上げた。
――――瞳だ。
手札の一つ。
遠隔操作を可能とし、視覚と聴覚、更に言語機能すら同調する、一つ目の肉人形。
烏程の大きさであるが、球体に大きな一つ目と翅を着けた形態は怪生物と言って過言

なし。

怪生物はセフィロスを見ていた。サイタマを見ていた。S級ヒーロー達を見ていた。集ったA級ヒーロー達を見ていた。

戦いが始まってからずっと。

更に言えば、視線で気付くことは出来ない。武芸に秀でた達人たちは、視線の中に含まれる意を感じとるものだから。彼女自身はずっと遠くにいる。監視カメラを通しているようなもの。

生体反応を検知することは出来ない。怪生物は生物にあらず、肉人形でしかないから。ラジコンを少し便利に使っているようなもの。

彼女の本体がもう少し近ければ、エスパーであるタツマキは気付けたかもしれない。同類だから。

けれど言っても詮無きこと。

この場において、目的達成のために条件設定を事細かく決め、それを実行して見せた彼女が情報戦において上手だっただけのこと。

――サイボーグ達の各種検知機能無効。クリア。

――達人たちの気配察知無効。クリア。

――ヒーロー協会により設置された監視カメラの破壊確認。クリア。

――救援要請により招集のかかったヒーローたちの経路予測。クリア。
――後にメタルナイトの来訪を予測。撤退までの時間制限を設定。クリア。
「面白い。宇宙人か。あのエネルギーをオロチに取り込むことが出来れば、更なる進化が見込めそうだな。だが……どうもオロチでは勝てそうにないか」
怪生物の操縦士は己が寝床で一人謡う。
女だった。
一人の美女と形容しても良い風貌の、眼鏡を掛け、波打つ長髪を遊ばせる女。
彼女こそが次の動乱を呼び寄せるだろう。引き起こすだろう。
だがそれは……未だ誰も知ることはない。
「都合良くS級ヒーローも戦ってくれるとは、思わぬ幸運。戦力分析も捗る」
それに、と。
彼女は一人のヒーローへ目を向けた。
本当ならセフィロス以外など見たくもないが、それでも見なければならない。
己の目指すモノは、盲目では達成困難な事柄なのだから。
恋は盲目とはよく言ったものだ。
思わず嘲笑が洩れる。
本当に手に入れたいと思ったとき、真に本気だと魂に誓えるならば、

盲目になどなろう筈もないのに。
女はそう考え、しかし共感もまた抱く。
盲目になりたいと、彼女自身が思うのだ。
好いた男のことだけ考えて生きていけたら、それはなんと甘美な人生であろうか。
だがしかし、そうなる訳にはいかない。
禿頭のパッとしないヒーローを見据えて、意識を戻す。
黄色いコスチュームに、赤い手袋と白いマント。
宇宙人との戦闘時には真剣さが垣間見えたが、今となってはその面影もない。
だが彼女は見ていた。感じていた。
そこに秘められたエネルギーを。
タツマキのように戦闘に特化した超能力の使い方ではなく、研究者としての使い方も試行錯誤を巡らせていたから。
彼女には分かった。理解が及んだ。
――あのハゲは私の理解の範疇を超えている。
「……戦力の見直しが必要だな。彼方も、そして此方側も」
最後にセフィロスを視界に収め、しかし湧き上がる感情を胸の奥に仕舞い込んだ。
彼女は操縦する怪生物を、抉れた地面の中へ潜り込ませる。

埋め立てることはあっても、無駄に掘り起こしはしないだろう。
そして誰も居なくなった闇の中。
夜の帳が下りてから、一対の翼が瞬く星を目指すように空を泳ぐのだった。
その羽ばたきは、いずれヒーロー達へと向かうだろう。
多くの破壊と混乱を携えて。
血潮を撒き散らすために這い寄って来る。
そして来たる翼を、彼等は甘受する以外にないのだろう。
怒りも、悲しみも、怯えも飲み込んで。
立ち向かう事しか許されない。
彼等は……ヒーローであるのだから。